松山市文化財調査報告書128

大庭小松集落道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

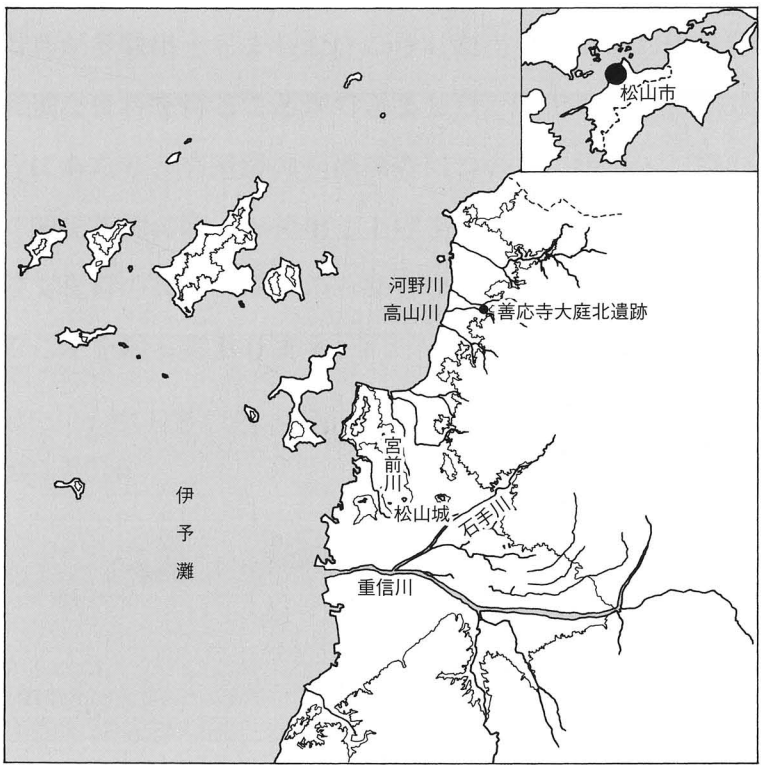
善応寺大庭北遺跡

2009

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

大庭小松集落道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

善応寺大庭北遺跡



2009

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

序

本書は、松山市善応寺において平成19年度に大庭小松集落道工事に伴って実施した善応寺大庭北遺跡の発掘調査報告書です。

本遺跡が所在する北条地区は、斎灘に面し南北に長く続く平野部と高縄山系を背後に控える丘陵部によって形成されております。この丘陵部を中心として主に弥生時代以降に多数の遺跡が存在することが知られています。特に中世においては地元の有力豪族であった河野氏が活躍した歴史の舞台となった地域でもあります。

今回報告する善応寺大庭北遺跡では、弥生時代から中世にかけての集落跡を検出し、当時の生活用具が多数出土しました。こうした当平野部における発掘調査例はこれまで数少なく、貴重な資料を得ることができました。

本書の刊行にあたり、当遺跡の発掘調査についてご指導・ご協力を頂きました関係各位、ならびに関係機関に厚くお礼申し上げます。

本書が埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、さらには文化財保護、生涯教育の向上に寄与できることを願っております。

平成21年１月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長　中　村　時　広

例　　言

1．本書は、松山市善応寺において松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが実施した善応寺大庭北遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、愛媛県中予地方局産業経済部農村整備第二課により計画された大庭小松集落道工事に伴う事前調査として2008（平成20）年１月７日から２月15日までの間に実施した。

3．遺構は呼称を略号で記述した。溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、柱穴：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸである。

4．本書に表示した標高数値は海抜標高を示し、方位はすべて国土座標を基準とした真北である。

5．遺構の撮影は、山之内志郎が行い、遺物の撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。

6．遺物の実測・製図、遺構図の製図は、木下奈緒美、田﨑真理、多知川富美子が行った。

7．縮尺は縄文土器と弥生土器が1/4、土師器と須恵器が1/3、石製品が1/2、小型石製品が2/3を基本とし、縮分値をスケール下に記した。

8．本調査における基準点測量は、㈱セントラルエンジニアリングに業務委託した。

9．報告書作成においては、㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター中野良一・多田仁・藤本清志各氏にご指導・ご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。

10．本書に関わる出土遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

11．本書の執筆及び編集は山之内が行った。

製版　写真図版－175線
印刷　オフセット印刷
用紙　本　　文－マットコート62.5kg
　　巻末図版－マットコート76.5kg
製本　アジロ綴じ

本　文　目　次

第１章　はじめに
１．調査に至る経緯…… 1
２．調査・刊行組織…… 1
３．立地と環境…… 2

第２章　試掘調査
１．経　緯…… 5
２．調　査…… 5
３．調査の結果…… 5

第３章　本格調査
１．経　緯…… 8
２．層　位…… 8
３．遺構と遺物……14

第４章　調査の成果と課題……32

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺の遺跡分布図（縮尺1/50,000）…… 3
第２図　トレンチ（Ｔ１・Ｔ２）配置図（縮尺1/1,000）…… 6
第３図　トレンチ（Ｔ１・Ｔ２）柱状土層図（縮尺1/40）…… 7
第４図　トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 7
第５図　調査地位置図（縮尺1/400）…… 9
第６図　遺構配置図（縮尺1/100）……10
第７図　東壁土層図(1)（縮尺1/40）……11
第８図　東壁土層図(2)（縮尺1/40）……12
第９図　東壁土層図(3)（縮尺1/40）……13
第10図　ＳＫ１測量図、出土遺物実測図（縮尺1/20・1/4）……14
第11図　ＳＤ１測量図、出土遺物実測図（縮尺1/20・1/3）……15
第12図　ＳＤ２測量図（縮尺1/20）……16
第13図　ＳＸ１測量図、出土遺物実測図（縮尺1/20・1/3）……18
第14図　ＳＸ２測量図（縮尺1/20）……19
第15図　第Ⅲ層遺物分布図（縮尺1/50）……20
第16図　第Ⅲ－①層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4・1/3）……21
第17図　第Ⅲ－①層出土遺物実測図(2)（縮尺1/3）……22
第18図　第Ⅲ－①層出土遺物実測図(3)（縮尺1/3・1/2）……23
第19図　第Ⅲ－②層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……24
第20図　第Ⅲ－②層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4・1/3・2/3）……25
第21図　第Ⅲ－②層出土遺物実測図(3)（縮尺1/3・1/2）……26
第22図　層位不明遺物実測図(1)（縮尺1/4・1/3）……27
第23図　層位不明遺物実測図(2)（縮尺1/3・2/3）……28

表　目　次

表１　土坑一覧……28
表２　溝一覧……28
表３　性格不明遺構一覧……28
表４　トレンチ出土遺物観察表　土製品……29
表５　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品……29
表６　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品……29
表７　ＳＸ１出土遺物観察表　土製品……29
表８　第Ⅲ－①層出土遺物観察表　土製品……29
表９　第Ⅲ－①層出土遺物観察表　石製品……30
表10　第Ⅲ－②層出土遺物観察表　土製品……30
表11　第Ⅲ－②層出土遺物観察表　石製品……31
表12　層位不明遺物観察表　土製品……31
表13　層位不明遺物観察表　石製品……32

写真図版目次

図版１　１．調査地遠景（西より）
　　２．調査前全景（南より）
図版２　１．掘削風景（南より）
　　２．遺構検出状況（南より）
図版３　1. 東壁土層①（北西より）
　　２．東壁土層②（南西より）
図版４　１．東壁土層③（南西より）
　　２．東壁土層④（南西より）
図版５　１．ＳＫ１完掘状況（西より）
　　２．ＳＤ１遺物出土状況（南西より）
図版６　１．ＳＸ１検出状況（西より）
　　２．ＳＸ１完掘状況（西より）
図版７　１．第Ⅲ層遺物出土状況①（南西より）
　　２．第Ⅲ層遺物出土状況②（南より）
図版８　１．第Ⅲ層遺物出土状況③（西より）
　　２．遺構・第Ⅲ層完掘状況（南より）
図版９　１．作業風景（北より）
　　２．現地説明会風景（北より）
図版10　１．ＳＫ１出土遺物、ＳＸ１出土遺物、第Ⅲ－①層出土遺物
図版11　１．第Ⅲ－②層出土遺物、層位不明遺物

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

2006（平成18）年12月、愛媛県松山地方局長　梅木　要氏（以下、申請者）より松山市善応寺甲82番地ほか（以下、申請地）における中山間地域総合整備事業　いよ高縄２期地区　集落道工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地周辺ではこれまでに財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター及び北条市教育委員会によって数多くの本格調査が実施され、弥生時代や古墳時代を中心とした集落関連遺構が確認されているほか、中世においては地方豪族である河野氏が居城を構えた地域として知られている。

そこで申請地における埋蔵文化財の有無を確認する必要があるため、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、センター）は試掘調査を2007（平成19）年１月29日(月)に実施した。試掘調査は、対象地内にＴ１・２の２本のトレンチを設定した（第２図）。調査の結果、Ｔ１では遺構・遺物ともに検出されなかった。一方、Ｔ２においては土坑２基を検出し、土師器片が出土した（第３・４図）。

この結果を受け申請者と文化財課・センターは、遺跡の取り扱いについて協議を重ね、工事に伴って消失する遺跡に対し記録保存のための発掘調査を実施することとなった。その対象地は、試掘調査によって遺構・遺物が検出されたＴ２を含む甲82番地のうち工事区間部分のみである。

発掘調査は、弥生時代から中世における集落の構造解明及び範囲確認を主目的とし、文化財課の指導のもとセンターが主体となり2008（平成20）年１月７日より開始した。

2．調査・刊行組織

調査地番　　松山市善応寺甲82番地の一部

調査期間　　2008（平成20）年１月７日(月)～２月15日(金)

調査面積　　86㎡

刊行組織（平成20年４月１日現在）

松山市教育委員会	教育長	土居　貴美
事務局	局長	石丸　修
	企画官	仙波　和典
	企画官	古鎌　靖
	企画官	岸　紀明
文化財課	課長	家久　則雄
	主幹	森　正経
	主幹	森川　恵克
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	吉岡　一雄
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	丹生谷博一
	次長	折手　均

次　　長　　重松　佳久
調査担当リーダー　　栗田　茂敏
教育普及担当リーダー　　梅木　謙一
調査担当　　山之内志郎・大西　朋子

3．立地と環境

（1）地理的環境

本遺跡が所在する風早平野は、瀬戸内海に突出する高縄半島の西縁部に位置する。この平野は、高縄山系に水源を持つ立岩川や河野川・高山川・粟井川の浸食・堆積作用によって形成された扇状地が接合し形成された南北に長く延びる沖積平野である。その東には標高986mの高縄山をはじめとする高縄山系が広がりをみせており、西は斎灘に面し、その奥には防予諸島を望むことができる。

本遺跡は斎灘に流れ込む河野川と高山川に挟まれた地点に位置し、その氾濫原に遺跡は展開している。

（2）歴史的環境

旧石器時代

遺物は龍徳寺山からナイフ形石器が、和田池で角錐状石器が採集されているほか、安養寺谷（辻新池）の池床で緑色硅岩製の細石核・石刃などが出土している。なお、同時代の遺構は現在のところ確認されていない。

縄文時代

遺物は、前田池で後期の六軒家Ⅰ式、小松川式土器が採集されているほか、晩期Ⅱ期の土器も出土している。そのほか後期の土器が採集された遺跡としてマス池・サオ池・河原池・阿部ヶ谷池・俵原池遺跡がある。また小山田遺跡では後期初頭と考えられる疑似縄文を施した深鉢が出土している。また別府遺跡２区では自然流路内で土器・石器が出土している。このように平野縁辺の低丘陵周辺で遺物が採集されているのみで、遺構は確認されていない。

弥生時代

前期は高山遺跡で土器が採集されている。また南宮ノ戸貝塚では石鏃・石匙・貝製垂飾品などが出土している。また片山遺跡では前期末の集落を区画する溝や貯蔵穴から多量の土器や石器が出土している。このように立岩川左右岸における独立丘陵上において遺跡が点在している。

中期になると遺跡数は増加し、恵良山南東麓に稗佐古・女夫池・菖蒲谷・西ヶ谷遺跡などの高地性集落が数多く確認されている。この時期に低地より丘陵頂部に集落を形成する点は特徴といえる。中尾山遺跡２次調査では、祭祀行為に使用されたと推定される焼成後穿孔の完形土器が数多く出土しており、注目される。

後期には、椋の原清水遺跡では製塩土器が出土している。その他、老僧奥・夏狩・柳が内遺跡などが存在している。大相院遺跡５～９区では後期後半～古墳時代初頭にかけての遺構から讃岐系や山陰系などの外来系土器が数多く出土している。

古墳時代

集落では、高山川の河岸段丘上に所在する北条常保免遺跡で4世紀以降の竪穴式住居跡４棟を検出していることから、当該期の集落が継続して営まれていたことが明らかとなった。この遺跡において

★善応寺大庭北遺跡　①和田池遺跡　②安養寺谷(辻新池)遺跡　③前田池遺跡　④マス池遺跡　⑤サオ池遺跡　⑥河原池遺跡
⑦阿部ヶ谷池遺跡　⑧俵原池遺跡　⑨小山田遺跡　⑩別府遺跡　⑪高山遺跡　⑫南宮ノ戸貝塚　⑬片山遺跡　⑭稗佐古遺跡　⑮女夫池遺跡
⑯菖蒲谷遺跡　⑰西ヶ谷遺跡　⑱中尾山遺跡　⑲椋の原清水遺跡　⑳老僧奥遺跡　㉑夏狩遺跡　㉒柳が内遺跡　㉓大相院遺跡
㉔北条常保免遺跡　㉕櫛玉比売神社古墳　㉖国津比古命神社　㉗小竹古墳　㉘名石古墳　㉙若宮古墳　㉚高山古墳　㉛上難波南古墳群
㉜新城古墳群　㉝上難波古墳群　㉞小山田古墳群　㉟奥の谷古墳　㊱龍徳寺山古墳群　㊲夏目古墳群　㊳常竹大谷古墳群　㊴センボ山古墳群
㊵薬師堂　㊶北条片町遺跡

第１図　調査地周辺の遺跡分布図

も讃岐系や山陰系などの外来系土器が出土している。

前期古墳では、立岩川周辺に櫛玉比売神社古墳（全長75m）や国津比古命神社古墳（全長50m）の前方後円墳が隣接して築造される。いずれも自然地形を利用して築造されており、墳丘には葺石を葺いており、円筒埴輪片が採集されている。また中期には北条平野から北東に山を越えた浅海地区において、小竹古墳・名石古墳・若宮古墳・高山古墳などの箱式石棺を主体部とする古墳が数多く確認されている。上難波南古墳群は横穴式石室・竪穴式石室・箱式石棺・木棺などを内部主体にもつ10基余りの古墳群で、中期以降に長期間にわたり築造されていたことが発掘調査によって明らかとなっている。

旧北条市域には300基以上の古墳が存在しているといわれているが、そのほとんどが新城古墳群・上難波古墳群・小山田古墳群などの横穴式石室を主体部にもつ小規模の後期古墳である。その一方で、奥の谷古墳のような大型の石材を石室に用いる県下最大級の横穴式石室を有する古墳もある。こうした古墳には畿内型横穴式石室の形態が影響していると考えられる。これらの北部地域以外でも龍徳寺山古墳群・夏目古墳群などの中部地域、常竹大谷古墳群・センボ山古墳群などの南部地域でも古墳の存在が知られている。特に龍徳寺山１号墳派玄室が前・後室の二室に分かれる特異な形態をもつ横穴式石室を主体部としており、注目される。

古代

奈良・平安時代の遺跡は数多くなく、別府遺跡１区では掘立柱建物跡や土坑を検出しており、古代に位置付けられる遺構と考えられる。大相院遺跡10区ではＳＸ内から古代の須恵器や円面硯が出土していることから、周辺地域に識字階級が存在した可能性が考えられる。その他、上難波庄部落に所在する薬師堂には奈良時代後半から平安時代初期と考えられる木心乾漆菩薩立像をはじめ、10～11世紀代の仏像が30体も安置されていることから、周辺に古代寺院が存在したことが考えられる。

中世

河野氏は風早郡河野郷の有力豪族で、13世紀以降にこの地域を拠点に台頭してきたが、その拠点を松山市道後の湯築城に移した後も隆盛を極めたことから、高縄山の西部山麓を中心に河野氏関連の中世山城が平野を取り囲むように存在している。これらの実態や築城時期については正式な発掘調査が行われていないために不明な点が多く、また旧来の根拠地である土居館は河野通盛が京都の東福寺に模して改築して善応寺としたが、現在のところ、その場所や寺域等を確認することはできていない。また大相院遺跡７区では、土坑から風字硯・短刀・龍泉窯系劃花文青磁碗が出土していることから、識字階級の墓と考えられる。13世紀代の遺構や遺物が多数確認された北条片町遺跡では、平野部に展開した集落の様相が明らかとなっている。

〔参考文献〕

阪本安光『北条市上難波南古墳群調査報告書』1982　愛媛県教育委員会
中野良一ほか『小山田Ⅱ遺跡　小山田支群』1990　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
長井数秋『奥ノ谷山・西ヶ谷山遺跡群』1992　北条市教育委員会
大北冬彦ほか『片山遺跡　片山１号墳』1999　北条市教育委員会
土井光一郎『中尾山遺跡１次・２次』2003　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
大北冬彦ほか『北条常保免遺跡』2004　北条市教育委員会
三好裕之ほか『善応寺畔地遺跡　大相院遺跡　別府遺跡』2004　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
山之内志郎『北条片町遺跡』2008　㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第2章　試掘調査

1．経　緯

センターは申請地における試掘調査を2007（平成19）年１月29日(月)に実施した。試掘調査は、Ｔ１・２の２本のトレンチを設定し（第２図)、遺構と遺物、包含層の有無を確認した。

2．調　査

試掘対象地内にＴ１・２の２本のトレンチ調査区を設定する。トレンチを設定した地点はいずれも水田である。

Ｔ１より順次調査を行う（第２図)。まず重機によって掘り下げを行い、平面で遺構や遺物の有無を確認しながら進める。その後、土層の分層を行い、土層を記録する。さらにトレンチの位置図を作成し、写真撮影は各工程で適時行う。最後には清掃し現状復帰をして、トレンチ調査を終える。同様の手順をＴ２においても行う。このトレンチでは遺構を検出したため平板測量を行い、その位置を記録する。また遺物が出土したため、その位置を記録する。以上の手順で試掘調査を終了する。

3．調査の結果

試掘調査の結果、12層の土層を確認した（第３図)。

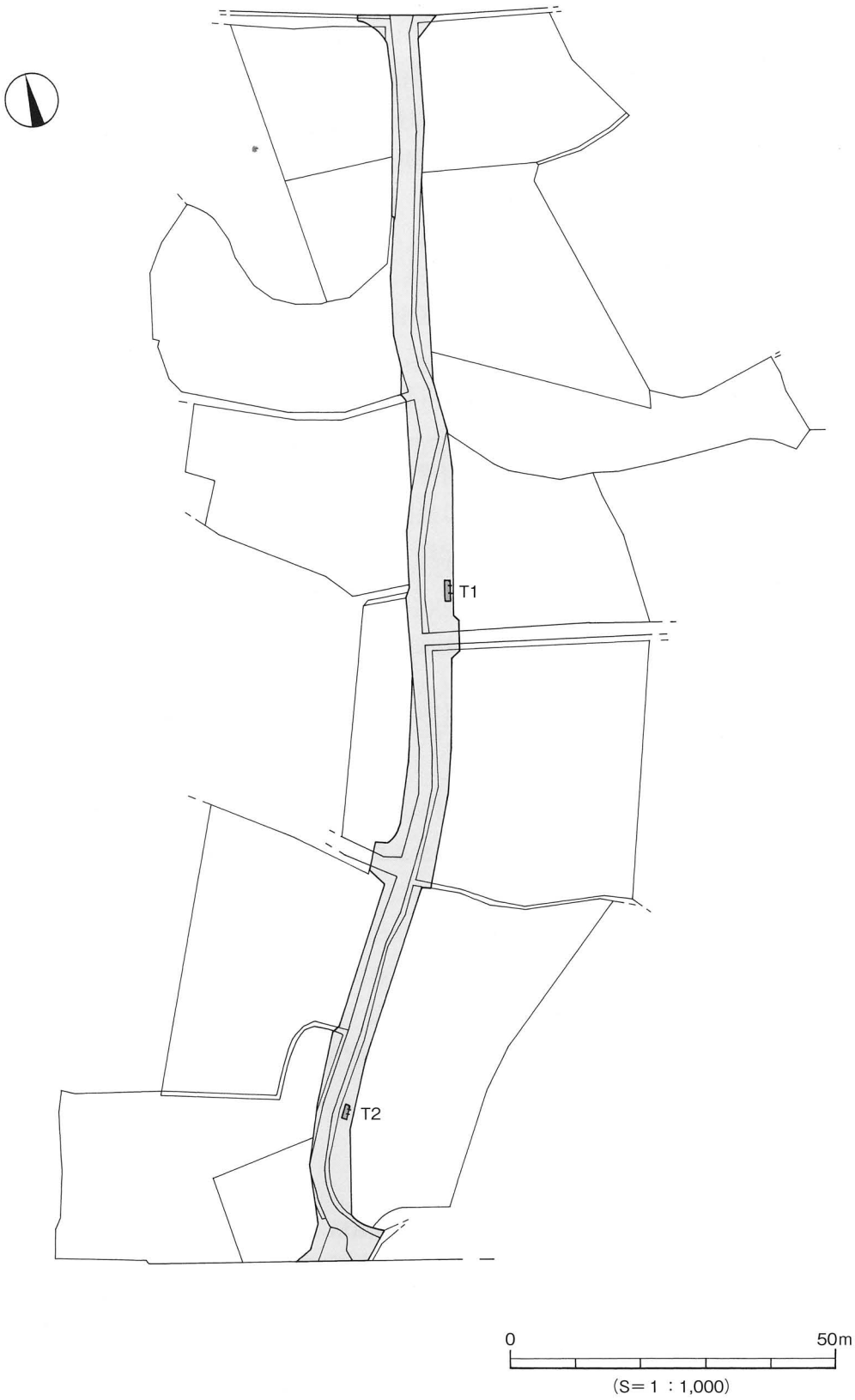
第１層－耕作土
第２層－明黄褐色粘質土（床土)
第３層－灰色砂質土
第４層－灰オリーブ色粘質土
第５層－褐灰色粘質土（遺物包含層)
第６層－黄褐色砂質土
第７層－褐灰色粘質土
第８層－褐灰色砂質土
第９層－褐灰色粗砂
第10層－青灰色粘土
第11層－灰色粗砂
第12層－暗青灰色粘土

第５層からは土師器や須恵器片が出土した。Ｔ１では遺構・遺物ともに確認することができなかった。Ｔ２においては土坑２基（ＳＫ１・２）を検出した。ＳＫ１の埋土は黒褐色粘質土で、埋土中より土師器片が出土した。ＳＫ２の埋土は黒褐色砂質土である。したがって、Ｔ２が所在する水田のうち、工事区間部分のみを本格調査の対象地とした。

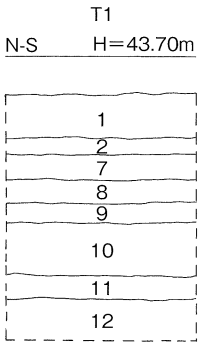
以下にＴ２において出土した遺物のうち、図化可能なものを報告する。

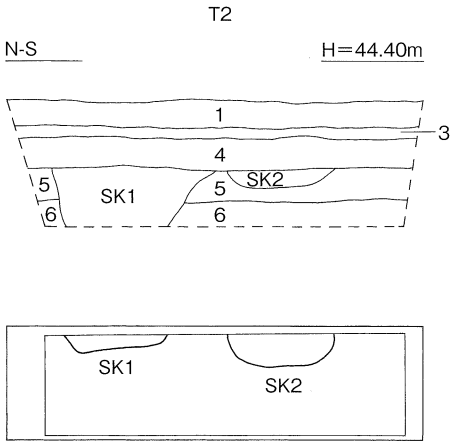
出土遺物（第４図)

１～４は須恵器である。１・２は坏蓋である。口縁部片。３は高台付坏である。焼きが生焼けで外面は灰オリーブ色を呈する。４は甕である。口頸部片。



第２図　トレンチ（Ｔ１・Ｔ２）配置図

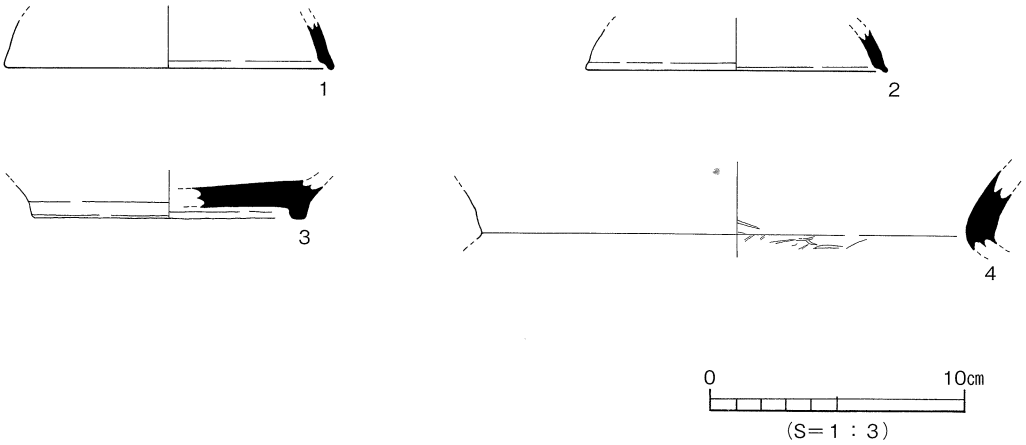




1．耕作土
2．明黄褐色粘質土（床土）
3．灰色砂質土
4．灰オリーブ色粘質土
5．褐灰色粘質土（遺物包含層）
6．黄褐色砂質土
7．褐灰色粘質土
8．褐灰色砂質土
9．褐灰色粗砂
10．青灰色粘土
11．灰色粗砂
12．暗青灰色粘土
SK1　黒褐色粘質土
SK2　黒褐色砂質土

0　1m
（S＝1：40）

第３図　トレンチ（Ｔ１・Ｔ２）柱状土層図



第４図　トレンチ出土遺物実測図

第3章　本格調査

1．経　緯

調査は１月７日から２月15日までの間、申請地にて屋外作業を行った。対象地は道路部分のため、南北に長い調査区である。まず重機により対象地西側にある石垣の除去から行い、同時に上層から水平に掘り下げを行い、遺構と遺物の検出を行った。その結果、対象地北半部では遺構は存在しておらず、南半部において縄文時代から中世の遺物を含む包含層を検出したため、それ以降は手作業によって調査を進めることとした。

まず包含層の掘り下げを行いながら、遺構の検出を行った。包含層は厚い箇所で約50cm、薄い箇所で約10cmの堆積があった。通常の遺跡調査の際における包含層の掘り下げ方法としては、仮トレンチを設定して包含層の堆積状況や厚さの確認を行うが、本調査では西側における石垣の除去に伴って土層壁が存在しなかったため、この工程を省略した。

調査にあたっては、世界測地系の基準点を４ｍメッシュでグリッドを設置し、調査地の区割りを行った。調査工程は下記のとおりである。

１月７日、発掘機材や道具の準備を行う。７～10日、重機で掘削を行い、遺構面及び東壁土層の精査を行う。11日、東壁土層の写真撮影を行い、南半部に存在する包含層の検出作業を行う。15日、東壁土層の図面作成を行う。ローリングタワーを使用し、包含層検出状況の写真撮影を行う。写真撮影終了後、包含層の掘り下げを開始する。16～18日、調査地全測図等を作成する。21～23日、雨天のため、土器の洗浄を行う。25日、基準杭の打設を行う。28～29日、雨天のため、土器の洗浄を行う。２月１日、ＳＫ１を検出し、掘り下げを行う。４日、ＳＫ１・ＳＸ１平面図を作成する。包含層出土遺物の出土状況平面図を作成する。５～７日、包含層の掘り下げを行う。８日、ＳＤ１・ＳＤ２を検出し、掘り下げを行う。９日、現地説明会を開催する。参加者約50名。12～13日、包含層の掘り下げを行う。東壁土層図の残り部分を作成する。ＳＸ２の平面図・コンタ図を作成する。ローリングタワーを使用し、完掘状況の写真撮影を行う。14～15日、出土遺物の土器洗浄及び注記を行う。プレハブ及び発掘機材や道具の撤収を行い、全ての屋外作業を終了する。

2．層　位

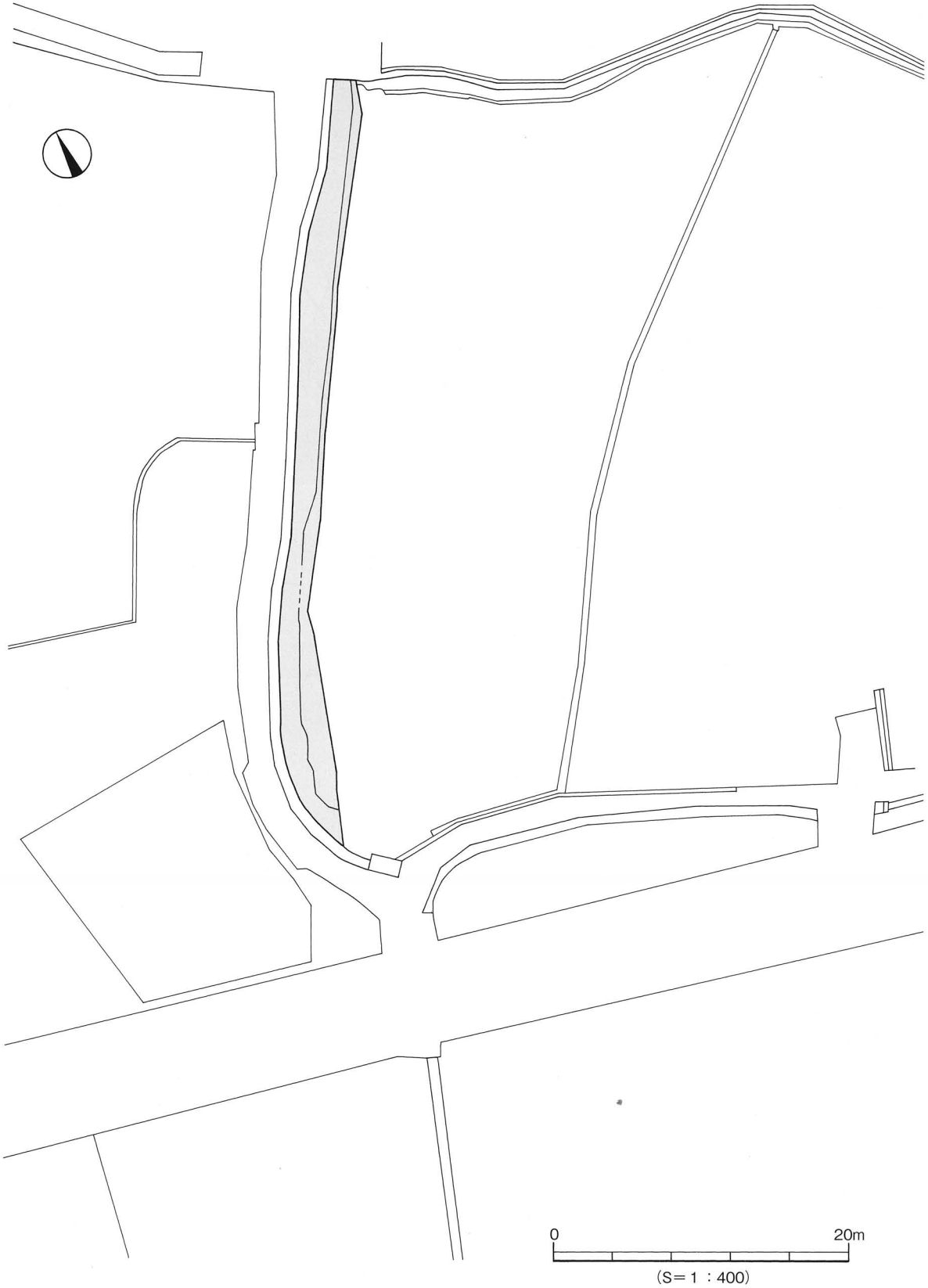
本調査地の基本層位は、第Ⅰ層灰色土（耕作土）、第Ⅱ層橙色土（床土）、第Ⅲ層灰褐色土（包含層）、第Ⅳ層黄色土（地山）である。遺構は第Ⅲ層途中、第Ⅳ層上面で検出した。（第７～９図）

第　Ⅰ　層　－耕作土で、灰色土である。調査地全域に広く堆積する。

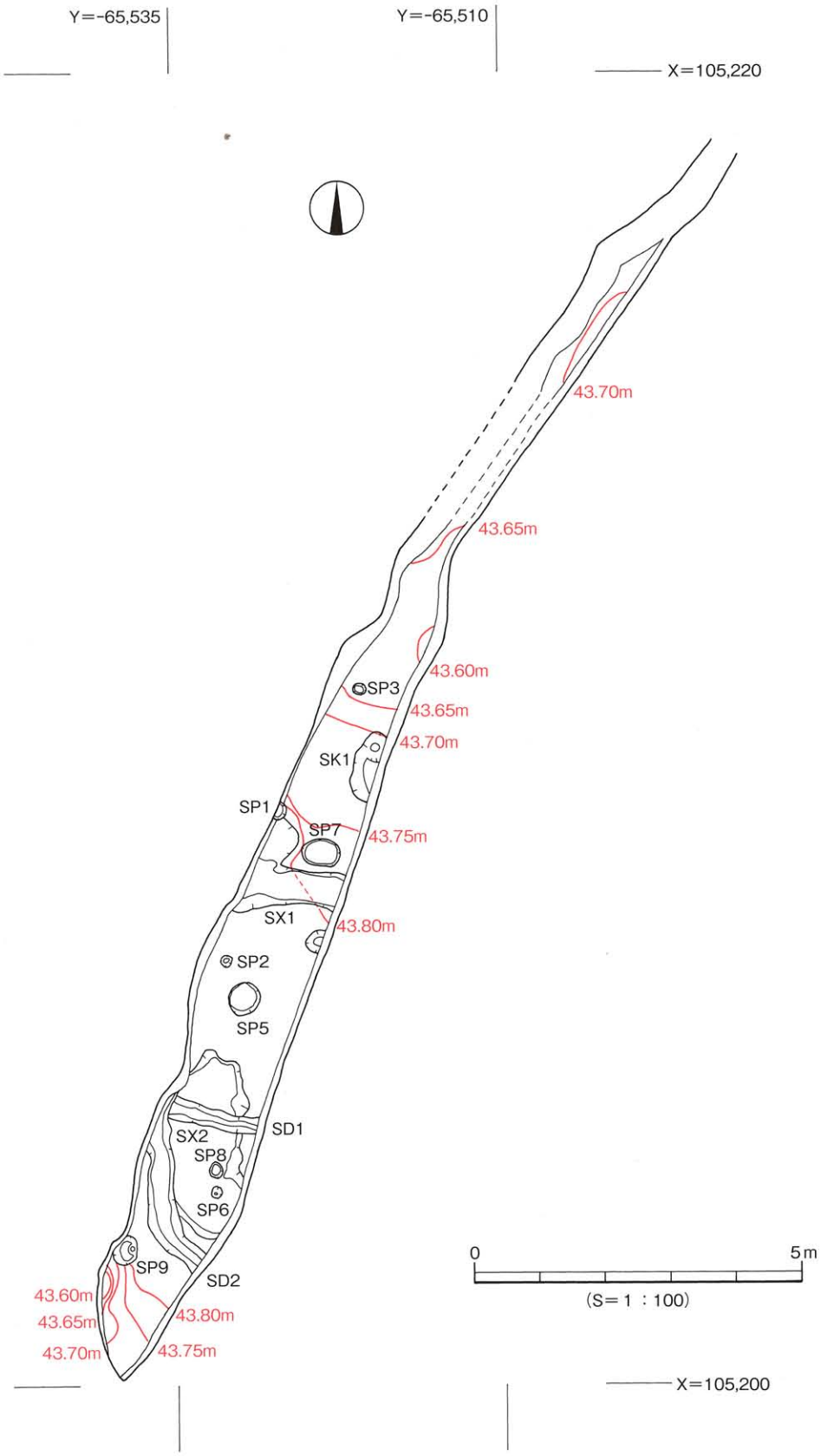
第　Ⅱ　層　－床土で、橙色土である。調査地全域に広く堆積する。

第　Ⅲ　層　－灰褐色土で、遺物包含層である。平均の厚さ約30cmを測る。調査地南半部のみに堆積する。この層のうち上層（第Ⅲ－①層）約10cmが暗灰褐色土で主に古代～中世の遺物が出土し、下層（第Ⅲ－②層）約20cmが灰褐色土で主に縄文時代・弥生時代・古代の遺物が出土する。

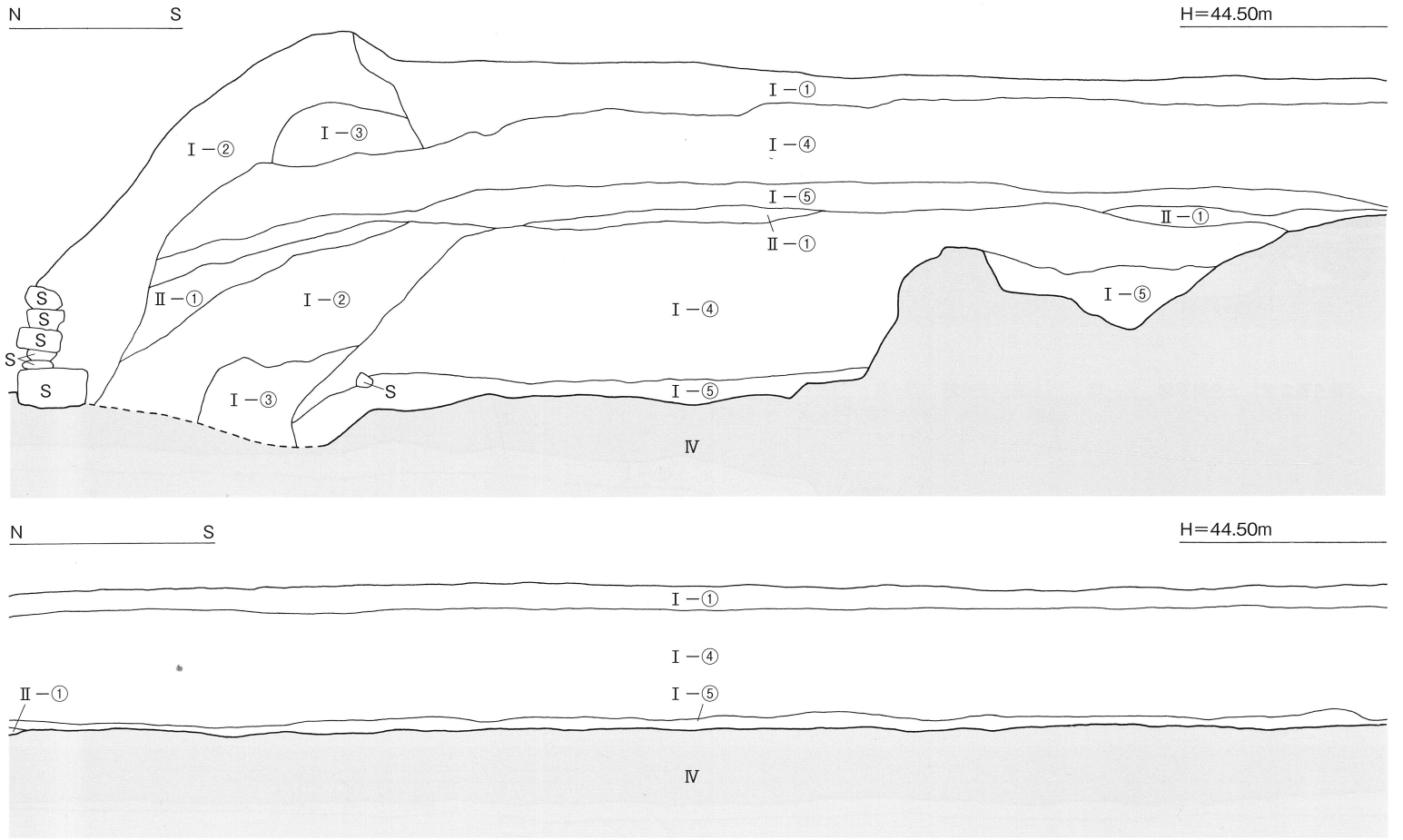
第　Ⅳ　層　－黄色土である。この層以下は無遺物層で、いわゆる地山と呼ばれる層である。調査地全域に堆積する。



第５図　調査地位置図


Y=-65,535
Y=-65,510
X=105,220
X=105,200
43.70m
43.65m
43.60m
SP3
43.65m
43.70m
SK1
SP1
SP7
43.75m
SX1
43.80m
SP2
SP5
SD1
SX2
SP8
SP6
SP9
SD2
43.60m
43.65m
43.70m
43.80m
43.75m
0
5m
(S=1：100)

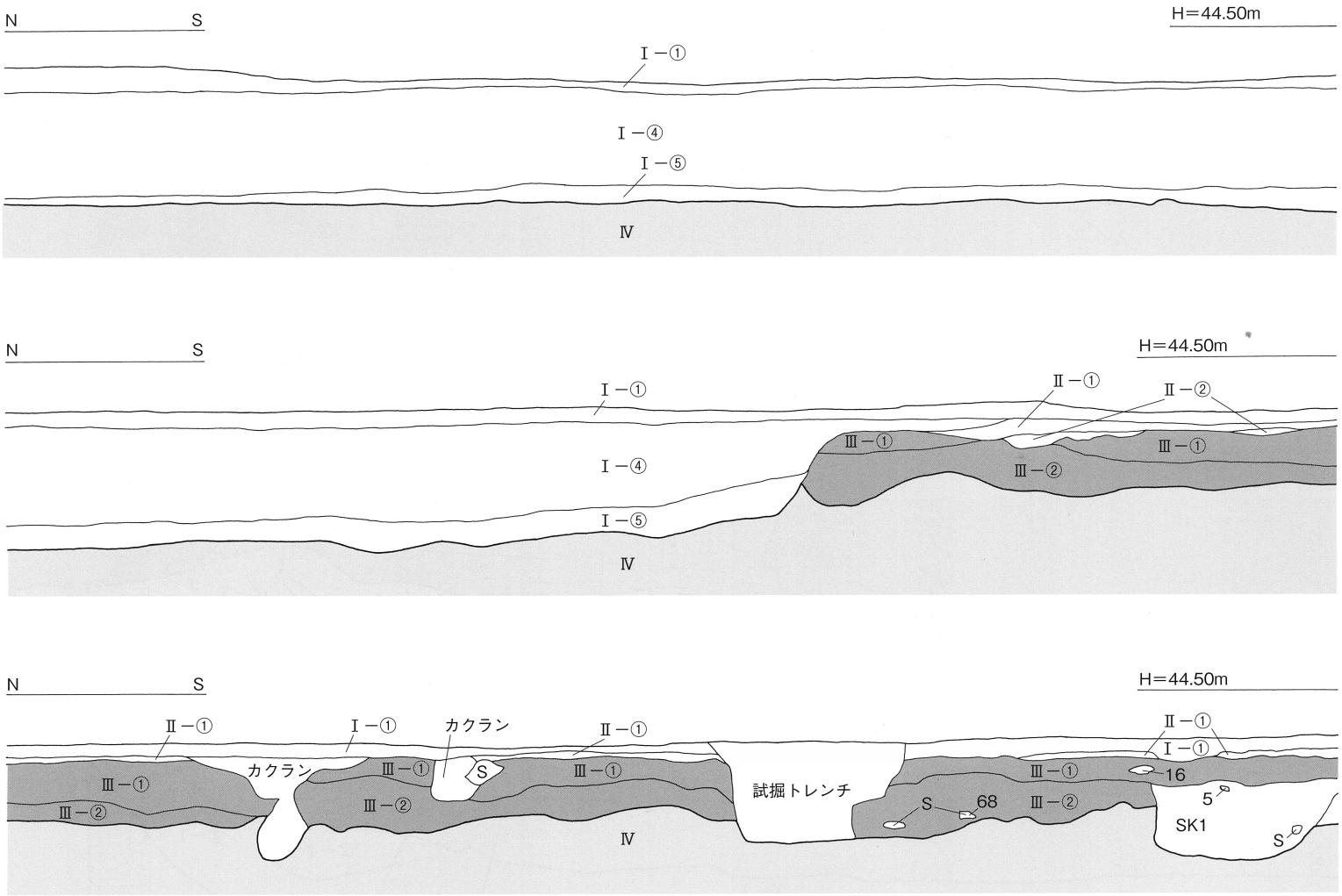
第6図　遺構配置図



Ⅰ－①　灰色土（耕作土）　Ⅰ－②　暗黄色土（真砂土）　Ⅰ－③　黄色土（真砂土）　Ⅰ－④　灰橙色土　Ⅰ－⑤　明灰色土（旧耕作土）
Ⅱ－①　橙色土（床土）　Ⅳ　黄色土（地山）

0　2m
（S＝1：40）

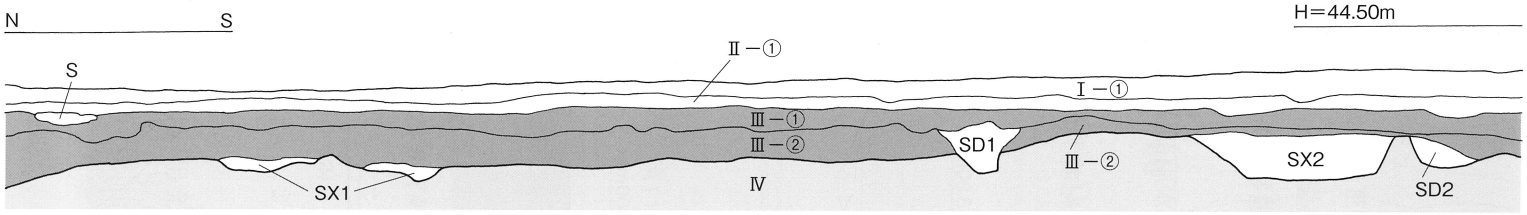
第７図　東壁土層図(1)



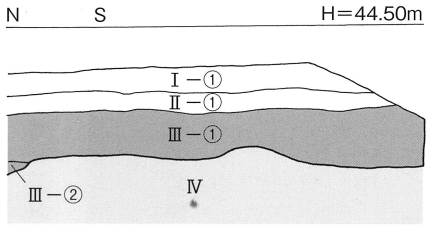
Ⅰ－①　灰色土（耕作土）　Ⅰ－④　灰橙色土　Ⅰ－⑤　明灰色土（旧耕作土）
Ⅱ－①　橙色土（床土）　Ⅱ－②　灰橙色土
Ⅲ－①　暗灰褐色土（包含層上層）　Ⅲ－②　灰褐色土（包含層下層）　Ⅳ　黄色土（地山）

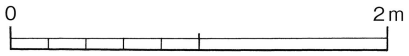
0　2m
（S＝1：40）

第８図　東壁土層図(2)



Ⅰ－①　灰色土（耕作土）　Ⅱ－①　橙色土（床土）　Ⅲ－①　暗灰褐色土（包含層上層）
Ⅲ－②　灰褐色土（包含層下層）　Ⅳ　黄色土（地山）





（S＝1：40）

第９図　東壁土層図(3)

3．遺構と遺物

検出した主な遺構は、土坑１基、溝２条、柱穴８基、性格不明遺構２基である。主な出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石製品などがある。以下、主な遺構と遺物を記述する。

（1）土坑（ＳＫ）

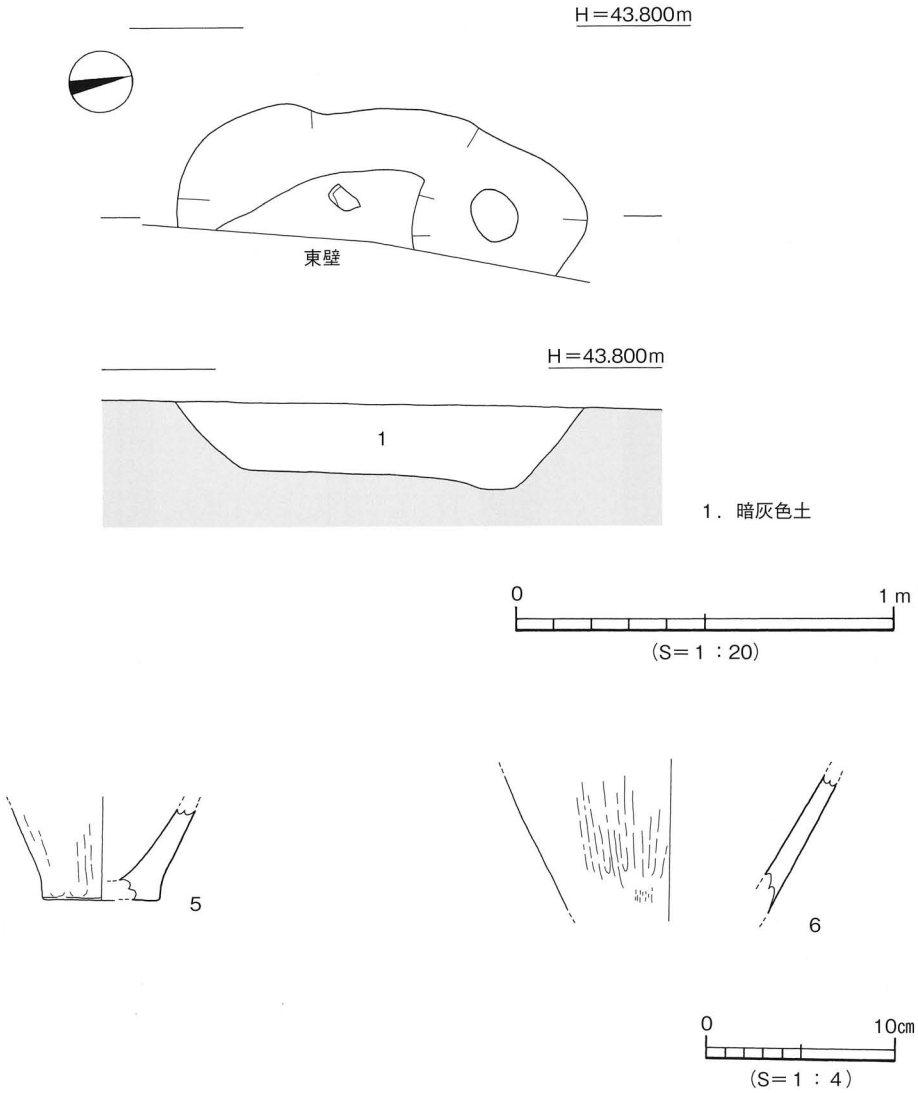
ＳＫ１（第10図、図版５）

ＳＫ１は調査地南半部に位置し、東半部は調査区外に続く。第Ⅲ層の掘り下げ途中で検出した。平面形態は長楕円形と推定され、断面形態は北端が深い２段掘りを呈する。規模は検出長1.08m、検出幅0.30m、残存深さ約23cmを測る。埋土は暗灰色土である。出土遺物は弥生土器がある。

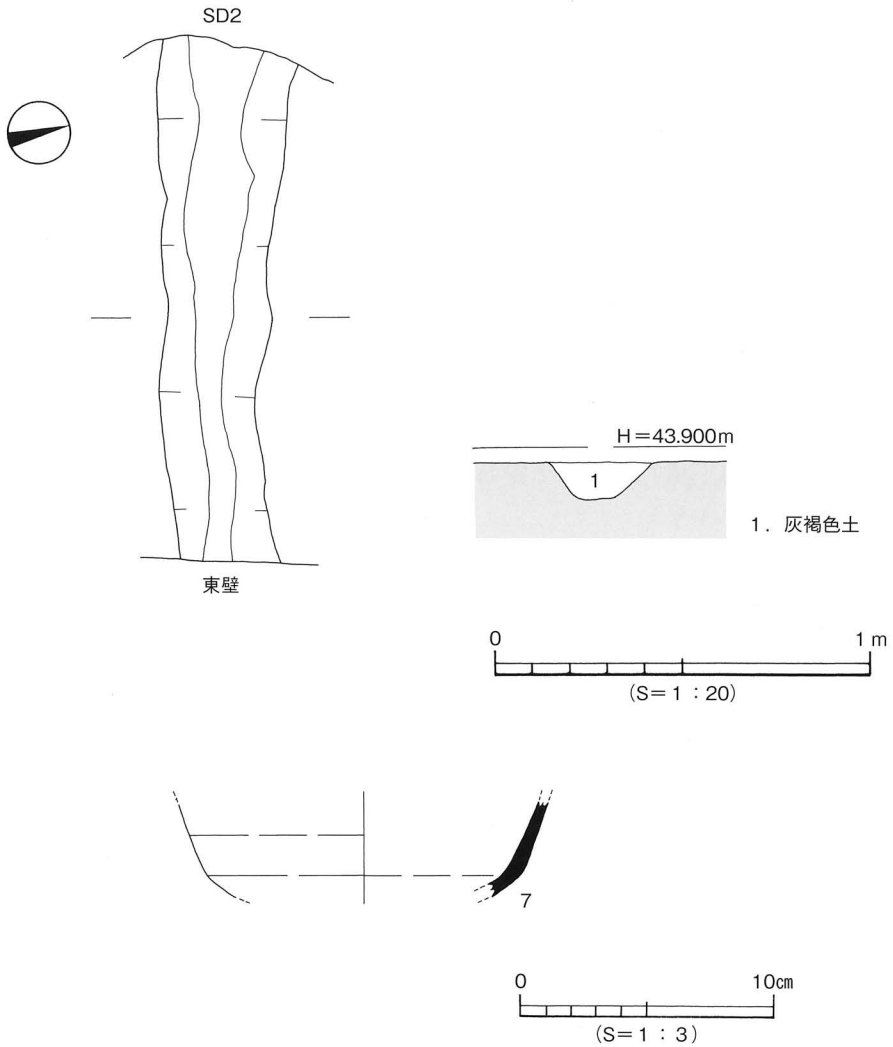
出土遺物（第10図、図版10）

５・６は弥生土器である。いずれも甕形土器で、５が底部、６が胴部片である。外面にヘラミガキ痕が顕著に残る。弥生時代中期後半～後期前半。

時期　ＳＫ１の埋没年代は、第Ⅲ－②層との切り合いから８世紀前半以降と考えられる。



第10図　ＳＫ１測量図、出土遺物実測図



第11図　ＳＤ１測量図、出土遺物実測図

（２）溝（ＳＤ）

ＳＤ１（第11図、図版５）

ＳＤ１は調査地南半部に位置し、ＳＸ１を切り、ＳＤ２に切られる。第Ⅲ層掘り下げ途中で検出した。東西方向に長く伸び、調査区外へ続く。規模は検出長1.45m、上場幅0.24～0.35m、残存深さ約11cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色土である。出土遺物は土師器及び須恵器がある。

出土遺物（第11図）

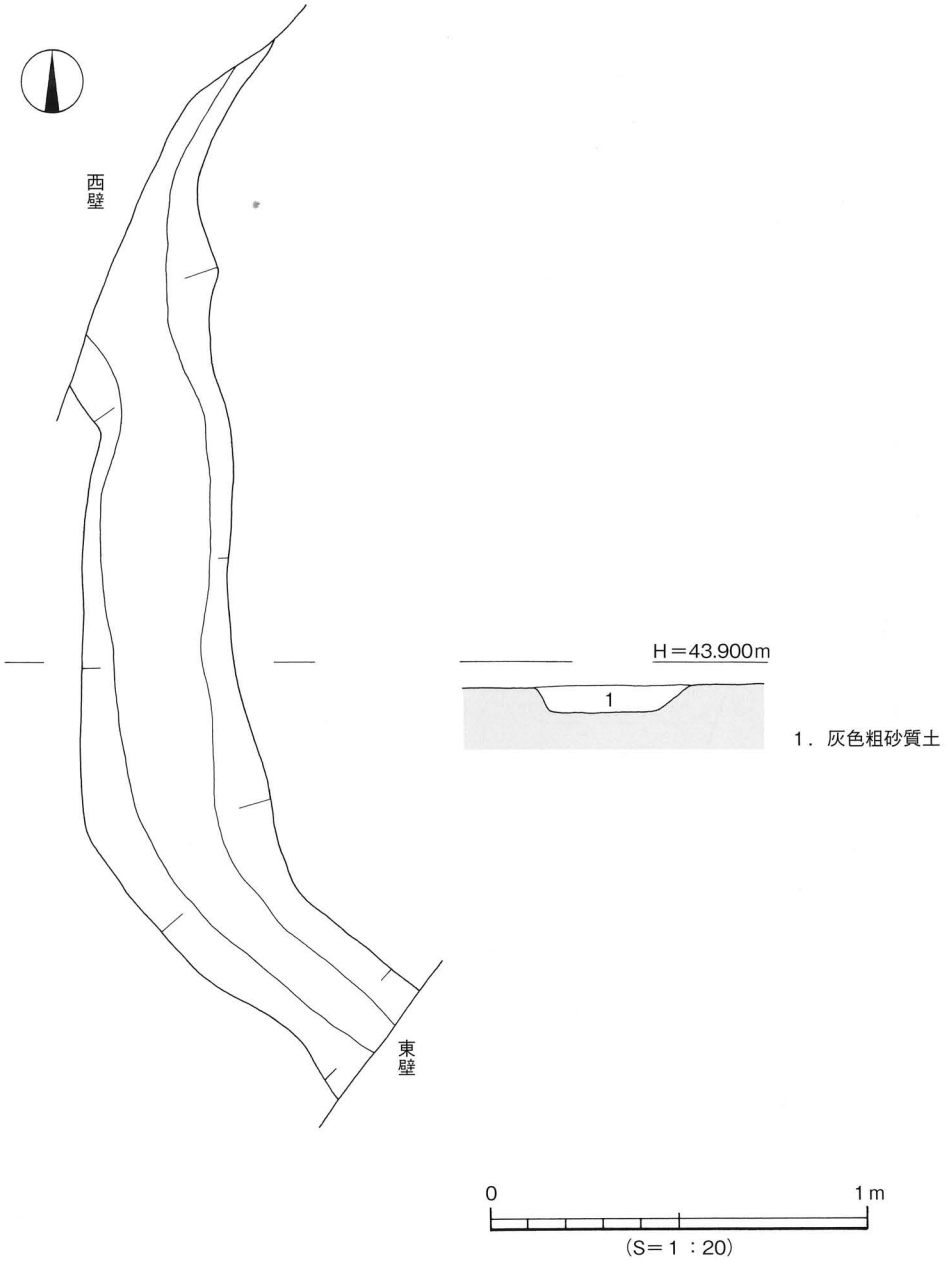
７は須恵器の坏である。体部片。口縁部は内湾気味に立ち上がる。７世紀末～８世紀前半。

時期　ＳＤ１の埋没年代は、出土遺物から８世紀前半と考えられる。

ＳＤ２（第12図）

ＳＤ２は調査地南半部に位置し、ＳＤ１を切る。第Ⅲ層掘り下げ途中で検出した。調査区外から南方向へ直線的に長く伸びたのち、東方向へ屈曲し調査区外へ続く。規模は検出長2.30m、上場幅0.27～0.50m、残存深さ約７cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰色粗砂質土である。出土遺物は土師器があるが図示できるものはなかった。

時期　ＳＤ２の埋没年代は、ＳＤ１との切り合いから８世紀前半以降と考えられる。



第12図　ＳＤ２測量図

（3）柱穴（ＳＰ）

柱穴は８基を検出したが、建物等を復元できる配置での検出はみられなかった。埋土は、埋土Ａ：灰色粘質土、埋土Ｂ：暗灰色土、埋土Ｃ：灰褐色土の３種に分けられる。埋土Ａの柱穴はＳＰ１・２・３・７の４基、埋土Ｂの柱穴はＳＰ５・６・９の３基、埋土Ｃの柱穴はＳＰ８の１基である。

（4）性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ１（第13図）

ＳＸ１は調査地南半部に位置し、東部及び西部は調査区外に続く。ＳＰ１に切られる。第Ⅳ層上面

で検出した。平面形態は不定形である。断面形態は皿状を呈する。規模は検出長1.41m、検出幅0.47～1.40m、残存深さ約10cmを測る。埋土は灰色微砂質土である。出土遺物は須恵器がある。

出土遺物（第13図、図版10）

８は須恵器の坏である。体部～口縁部片。口縁部は直線的に立ち上がる。

時期　ＳＸ１の埋没年代は、第Ⅲ－②層との切り合いから８世紀前半以前と考えられる。

ＳＸ２（第14図）

ＳＸ２は調査地南半部に位置し、東部は調査区外に続く。ＳＤ１・２、ＳＰ６・８に切られる。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は長楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は検出長2.89m、検出幅1.10～1.44m、深さ約24～35cmを測る。埋土は灰色微砂質土である。出土遺物は土師器があるが図示できるものはなかった。

時期　ＳＸ２の埋没年代は、第Ⅲ－②層との切り合いから８世紀前半以前と考えられる。

（５）第Ⅲ層出土遺物

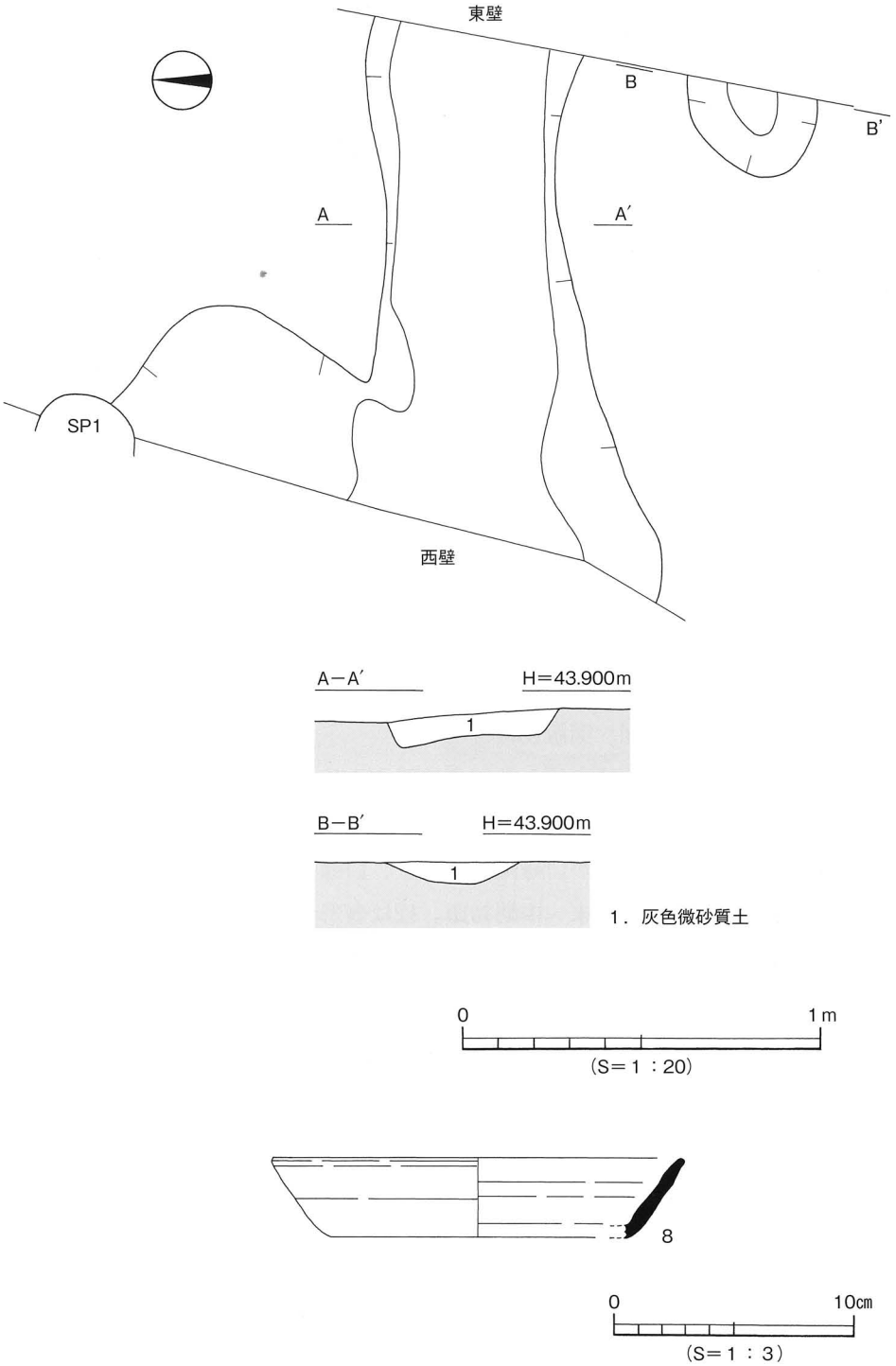
第Ⅲ層は調査地南半部に堆積した包含層で、多量の遺物が出土している。ここでは、第Ⅲ－①層、②層の順に出土遺物を詳述する。なお、主な遺物については第15図に分布を図示している。

第Ⅲ－①層出土遺物（第16～18図、図版10）

９は縄文土器である。口縁部外面に直線と曲線の沈線文を施す。表面摩滅のため縄文が施されていたかどうかは不明である。縄文時代後期後半。10～14は弥生土器である。10・11は甕形土器の口縁部片で、いずれも貼付口縁である。前者が口縁端面に刻目、口縁部下に５条以上の沈線を施すのに対して、後者は無文である。弥生時代前期末～中期初頭。12は壺形土器の口縁部、13は鉢形土器の口縁～胴部片、14は甕形土器の底部片である。15～22は須恵器である。15～18は坏蓋である。15～17の口縁部は短く下方に屈曲し接地する。16はほぼ完形品で、低い山形のつまみを有する。８世紀末～９世紀初頭。18の口縁端部は丸くおさめる。８世紀前半。19～21は坏である。22は皿である。口縁端部内面に１条の沈線を巡らす。23は土師器の皿である。口縁端部は屈曲したのち外方に突出する。24～32は須恵器である。24～30は高台付坏である。７世紀末～８世紀前半。31は高坏脚部である。端部は上下に拡張し、接地部は丸くおさめる。32は甕である。口頸部～肩部片。33～41は土師器である。33～37は椀である。33～35・37は断面三角形、36は断面四角形の高台を貼りつける。36・37の高台は外方向に張り出している。11～12世紀代。38～40は坏である。13～14世紀代。38は底部に回転糸切りの痕跡が残る。41は釜である。鍔部分の破片である。42は瓦器椀である。口縁部片。43は砥石である。欠損しているが中型品と考えられる。各面に使用痕が残る。

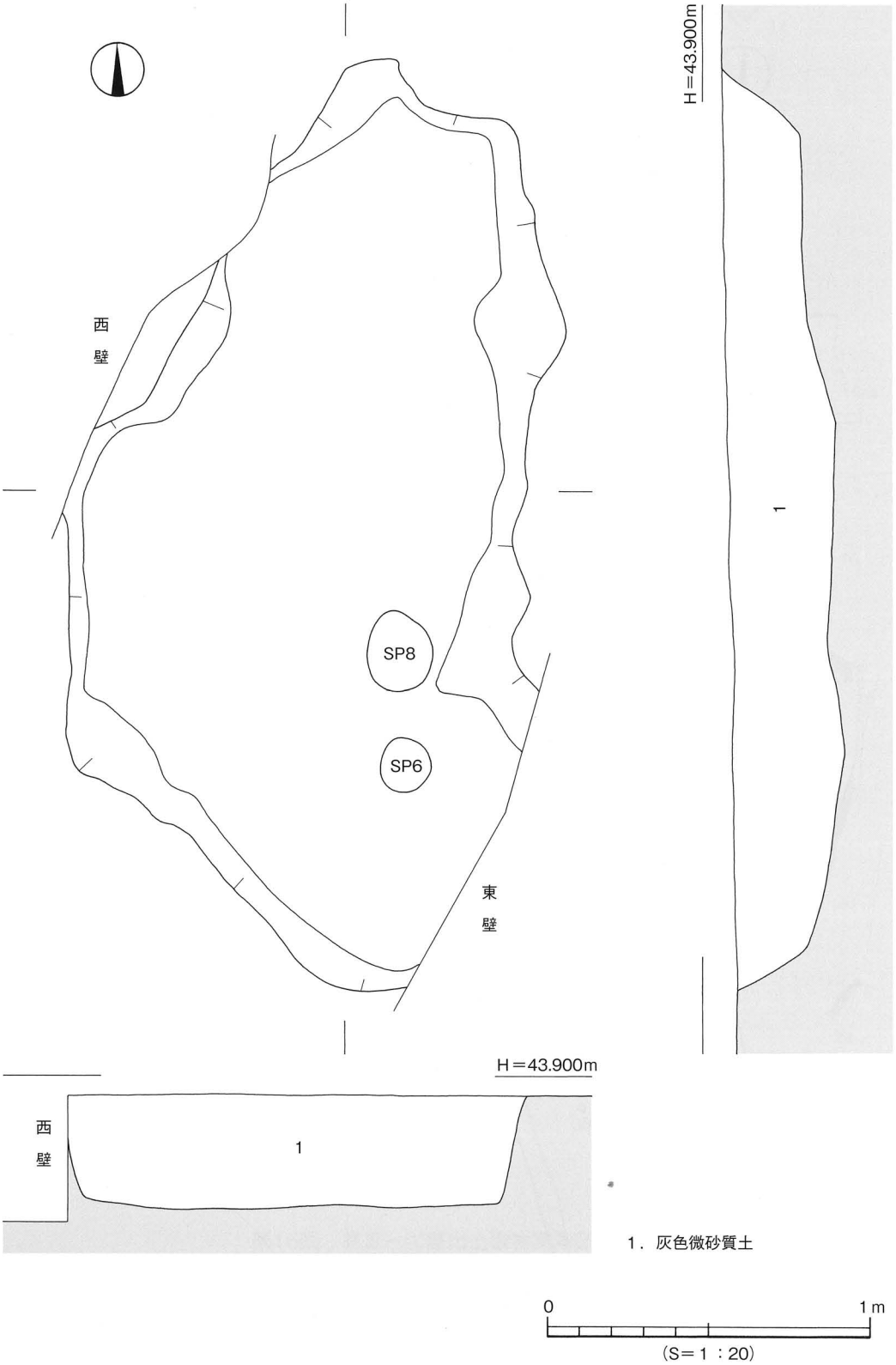
第Ⅲ－②層出土遺物（第19～21図、図版11）

44～50は縄文土器である。44～47は有文深鉢で、44は橋状の把手部上面に横方向の直線沈線文を施す。縄文時代後期前半。45は口縁部上面に直線と曲線の沈線文を組み合わせる。縄文時代後期前半。46は口縁部外面に直線と曲線の沈線文を施す。縄文時代後期後半。47は口縁端部上面に口縁部に対してほぼ直角に刻目を施す。縄文時代後期。48・49は無文深鉢である。ゆるやかに外反する口縁部をもち、端部を平面的に仕上げる。縄文時代後期。50は浅鉢の底部である。ゆるやかに上げ底になる底部である。縄文時代後期。51～60は弥生土器である。51～58は口縁部～頸部である。51～53は弥生時代前期末～中期初頭の甕形土器である。51・52は折り曲げ口縁、53は貼付口縁である。52はクシ描きに

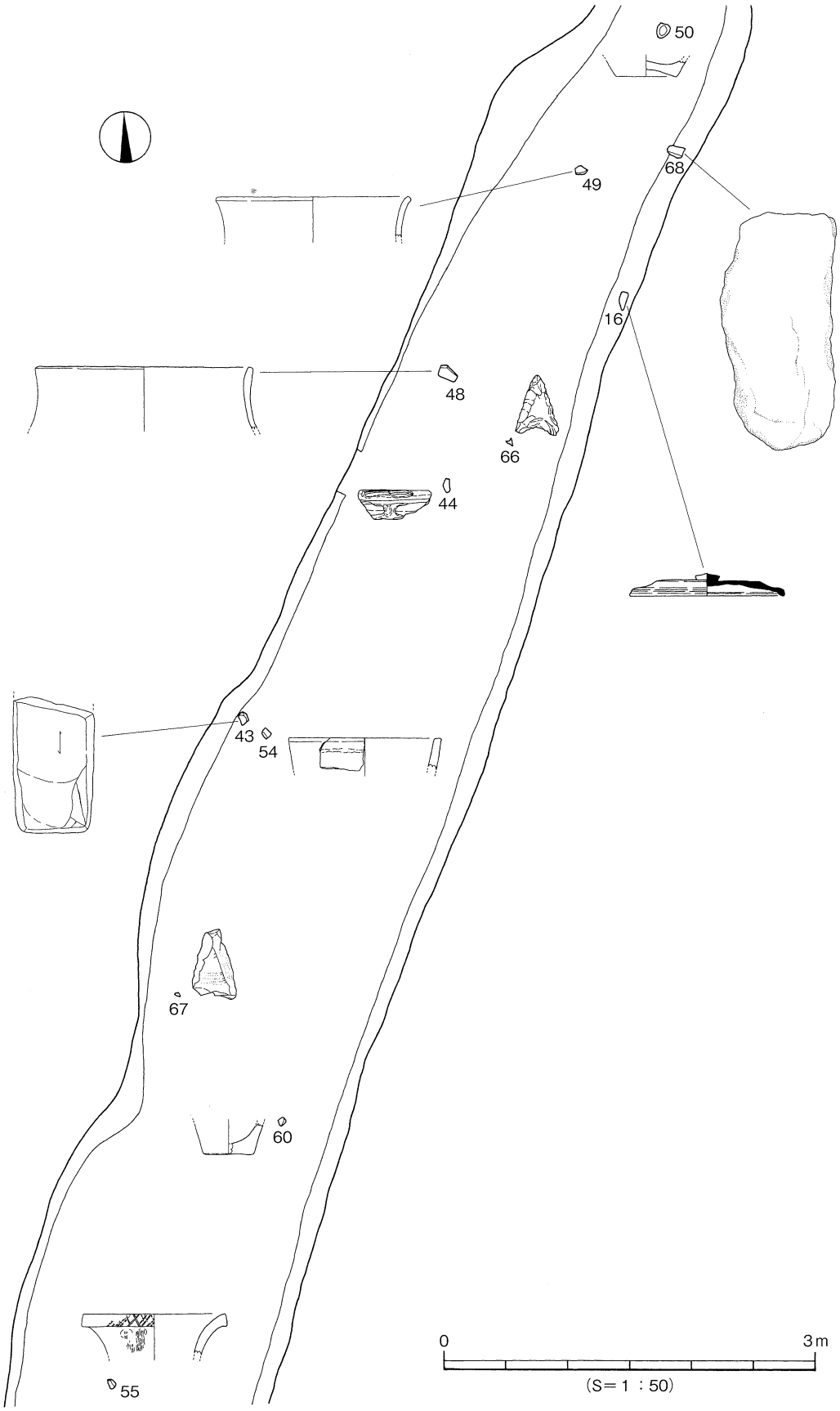


第13図　ＳＸ１測量図、出土遺物実測図

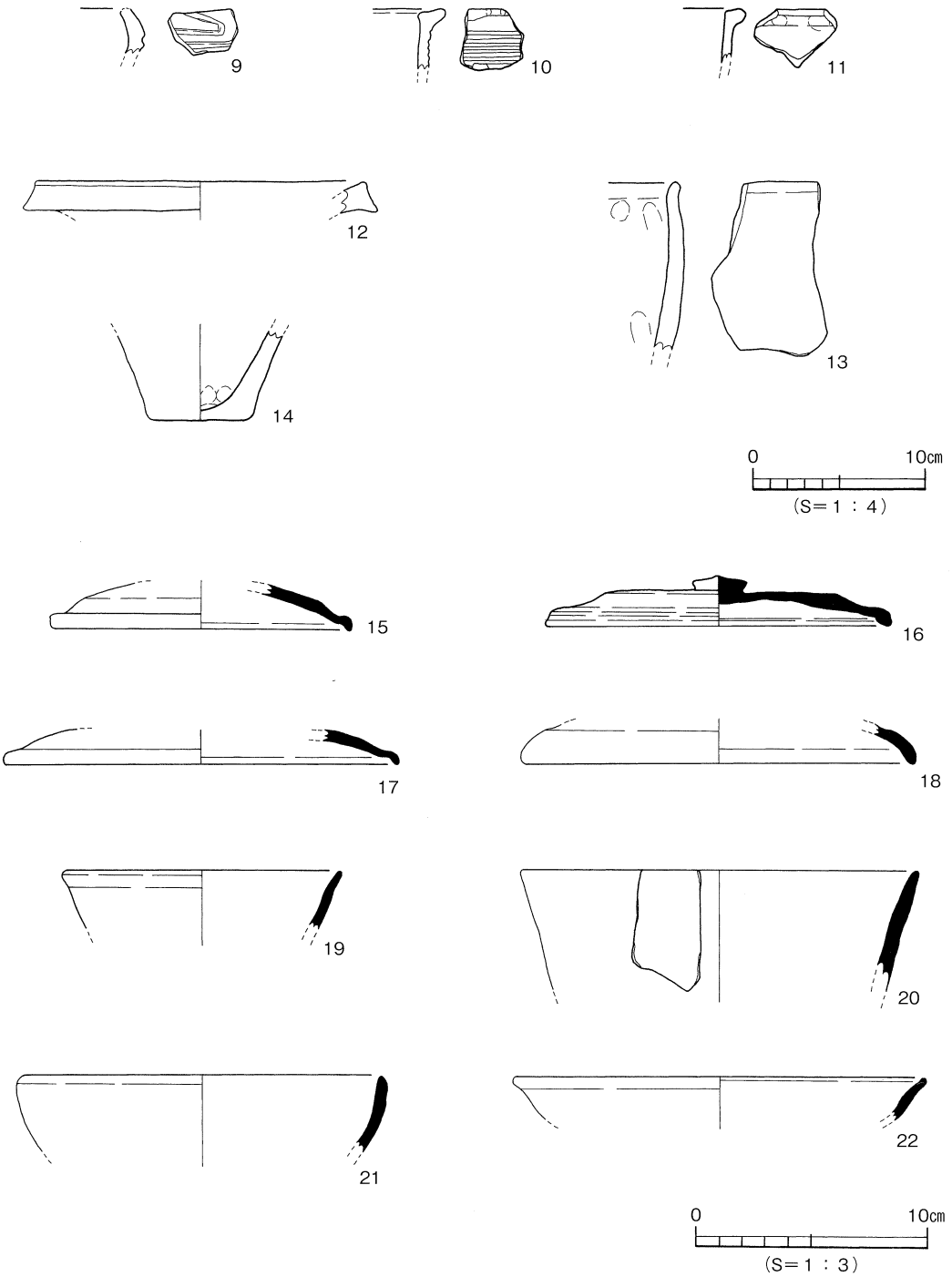
よる直線沈線文と波状の沈線文を組み合わせる。54・55は壺形土器である。54は鉢形土器の可能性もある。中期中葉。56～58は「く」字状口縁である。弥生時代後期前半。59・60は甕形土器の底部である。61は土師器である。皿の底部片で、内外面に赤色顔料が付着する。奈良時代と考えられる。62～65は須恵器である。62は坏蓋である。口縁部片で、端部は丸くおさめる。８世紀前半。63～65は高台付坏である。８世紀前半。66～69は石器及び石器未成品である。66はサヌカイト製打製石鏃である。67は石鏃未成品と考えられる。石材はサヌカイトである。68は石棒である。断面形状は不整形な円形を呈すると考えられる。69は磨石である。研磨痕が明瞭に残る。



第14図　ＳＸ２測量図



第15図　第Ⅲ層遺物分布図



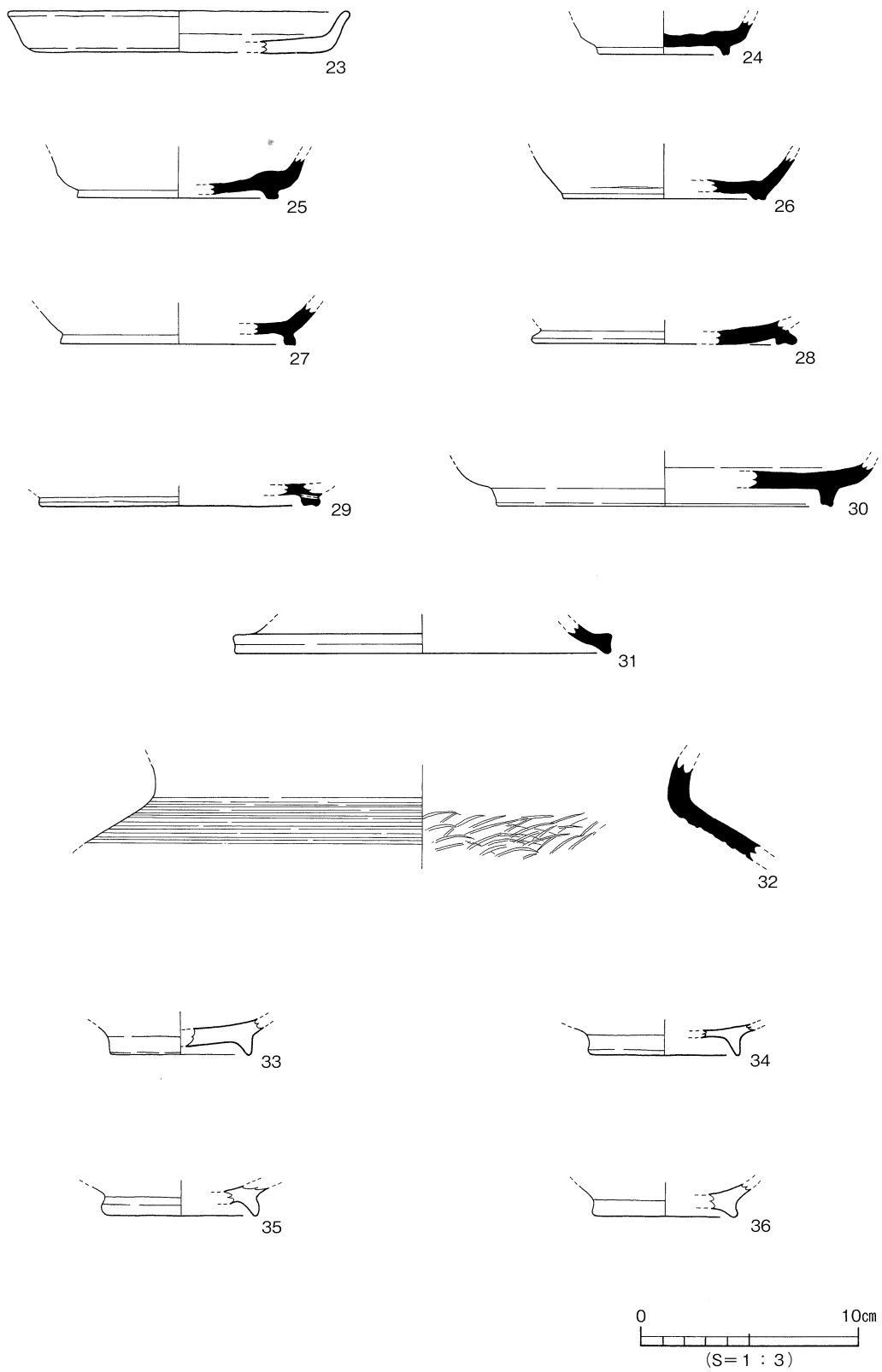
第16図　第Ⅲ－①層出土遺物実測図(1)

（6）層位不明出土遺物

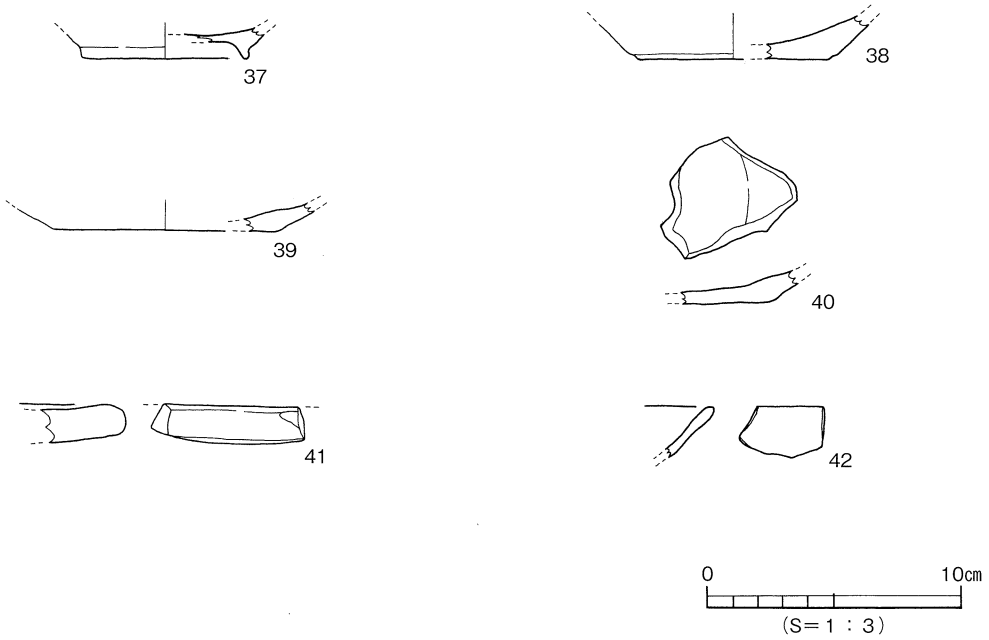
層位不明の遺物である。その多くは重機にて掘削する段階で出土したものである。

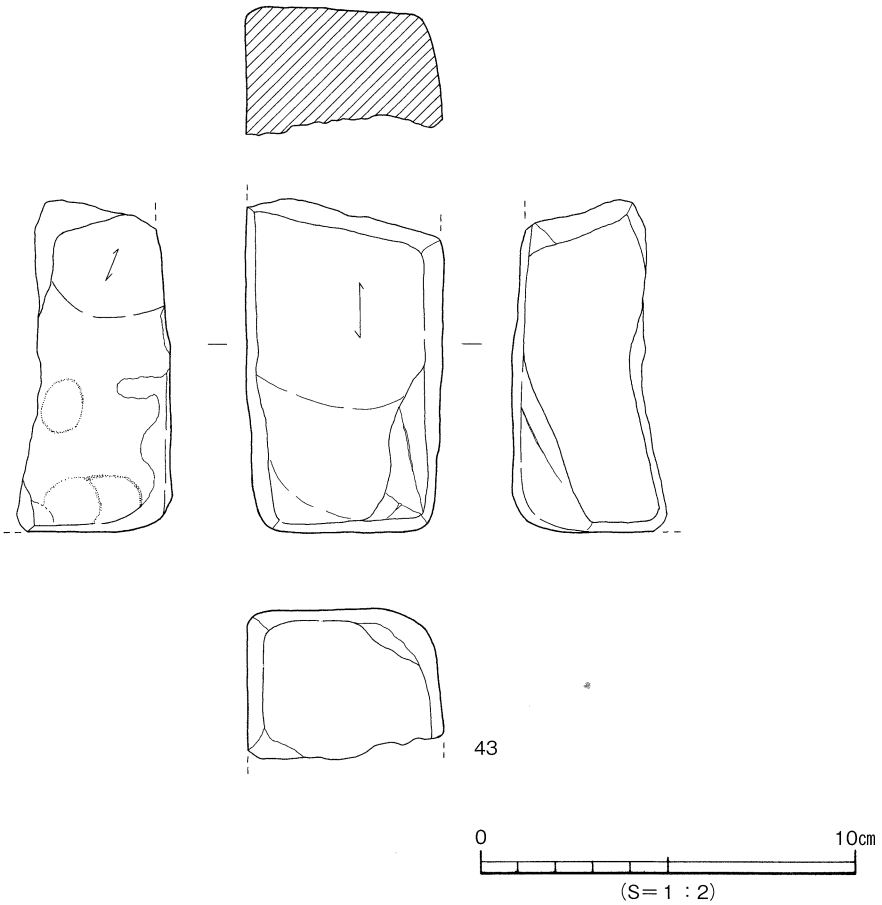
出土遺物（第22・23図、図版11）

70～73は弥生土器の壺形土器である。70・71は口縁部～頸部である。70は短頸の口縁部で、肩部の張りの弱いもので、71は肩部の張りの強いものである。72･73は底部である。74～77は土師器である。

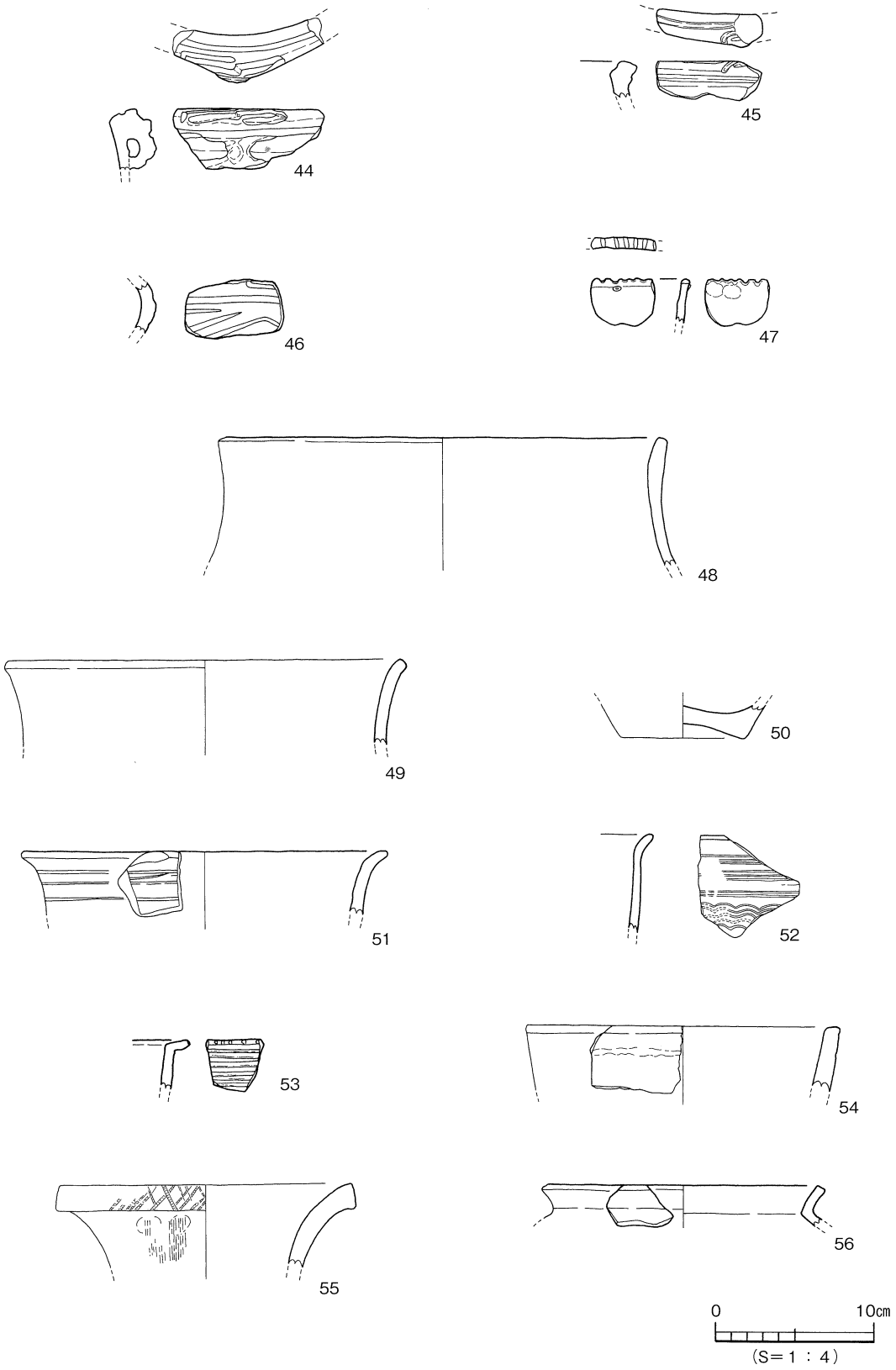


第17図　第Ⅲ－①層出土遺物実測図(2)

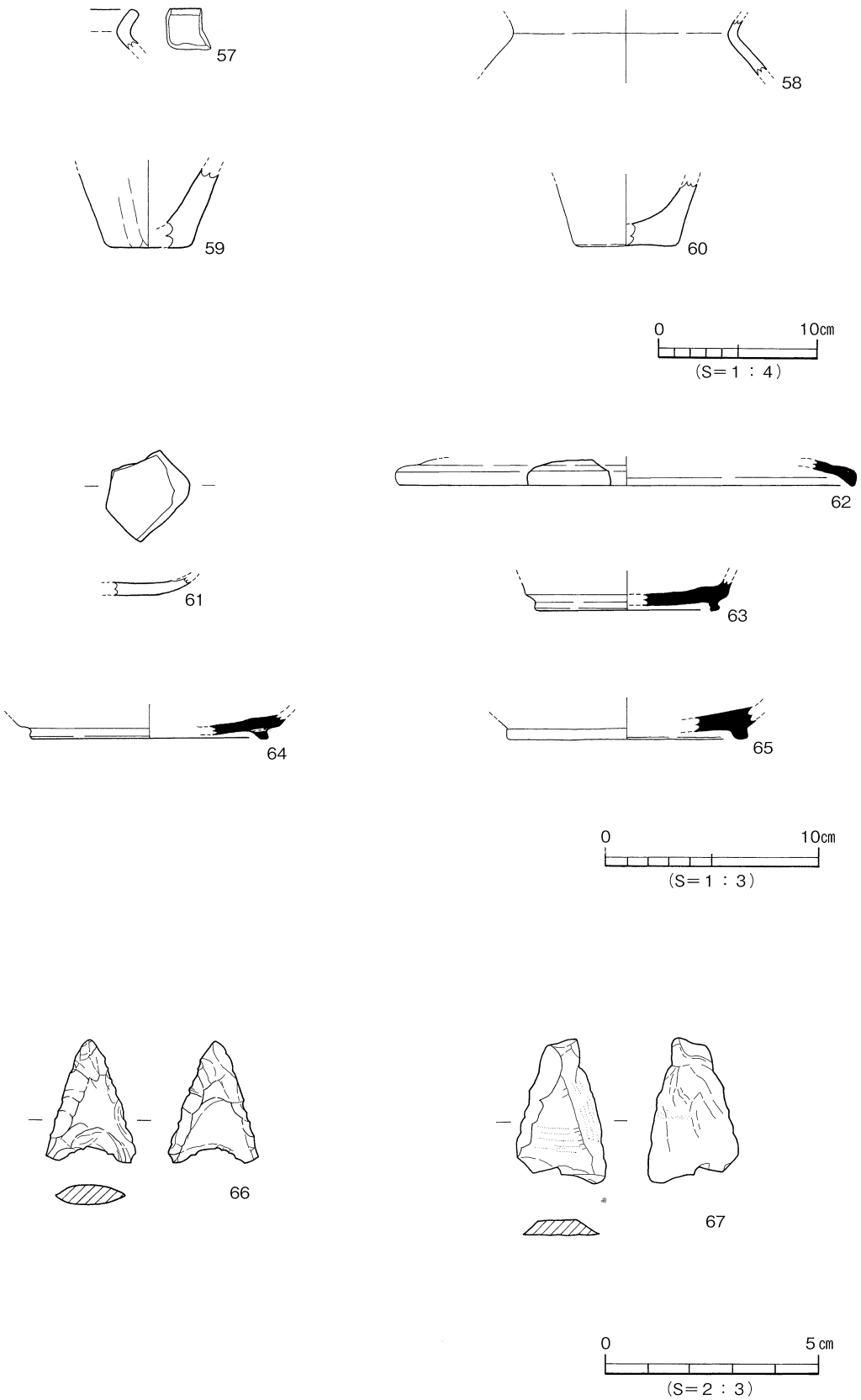




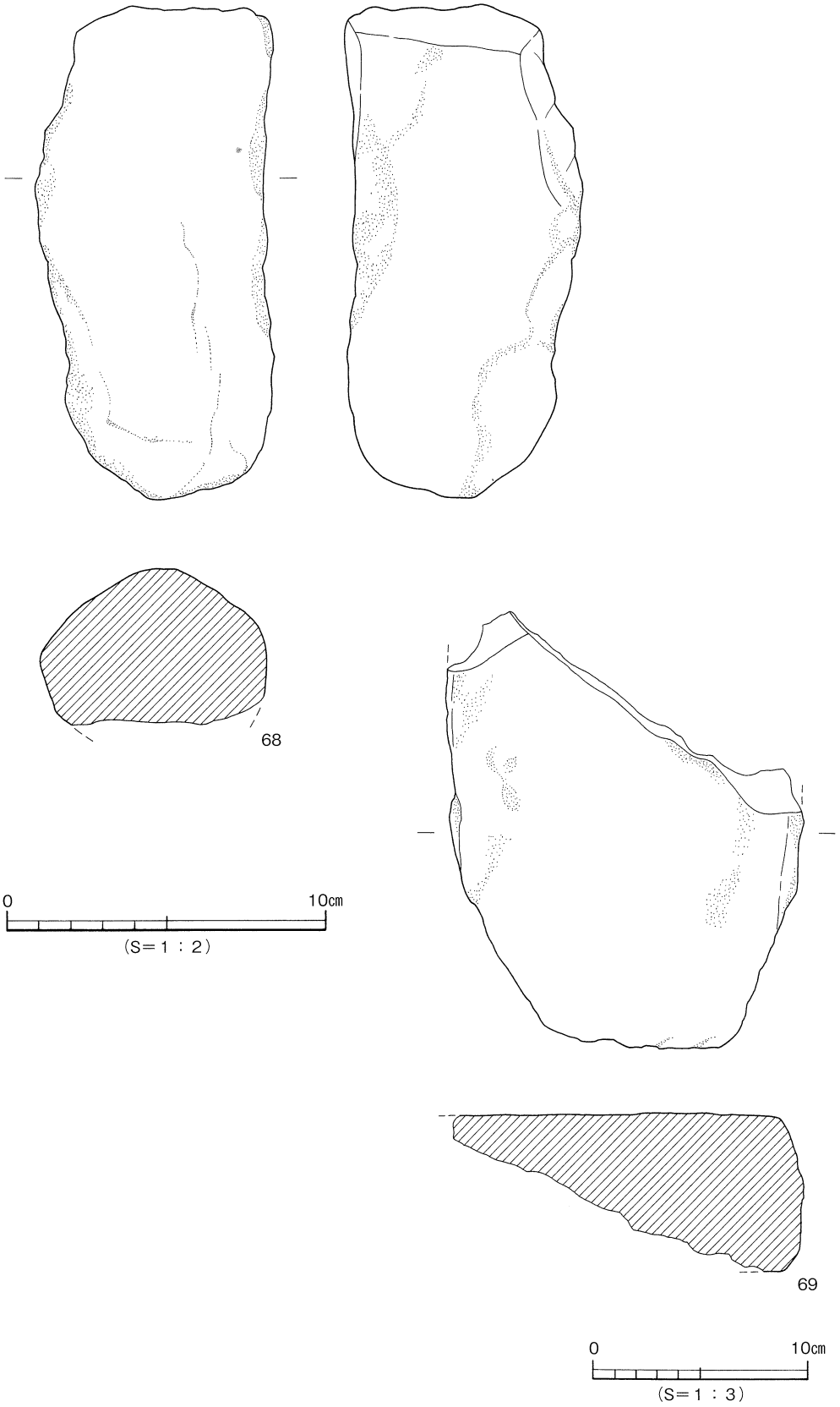
第18図　第Ⅲ－①層出土遺物実測図(3)



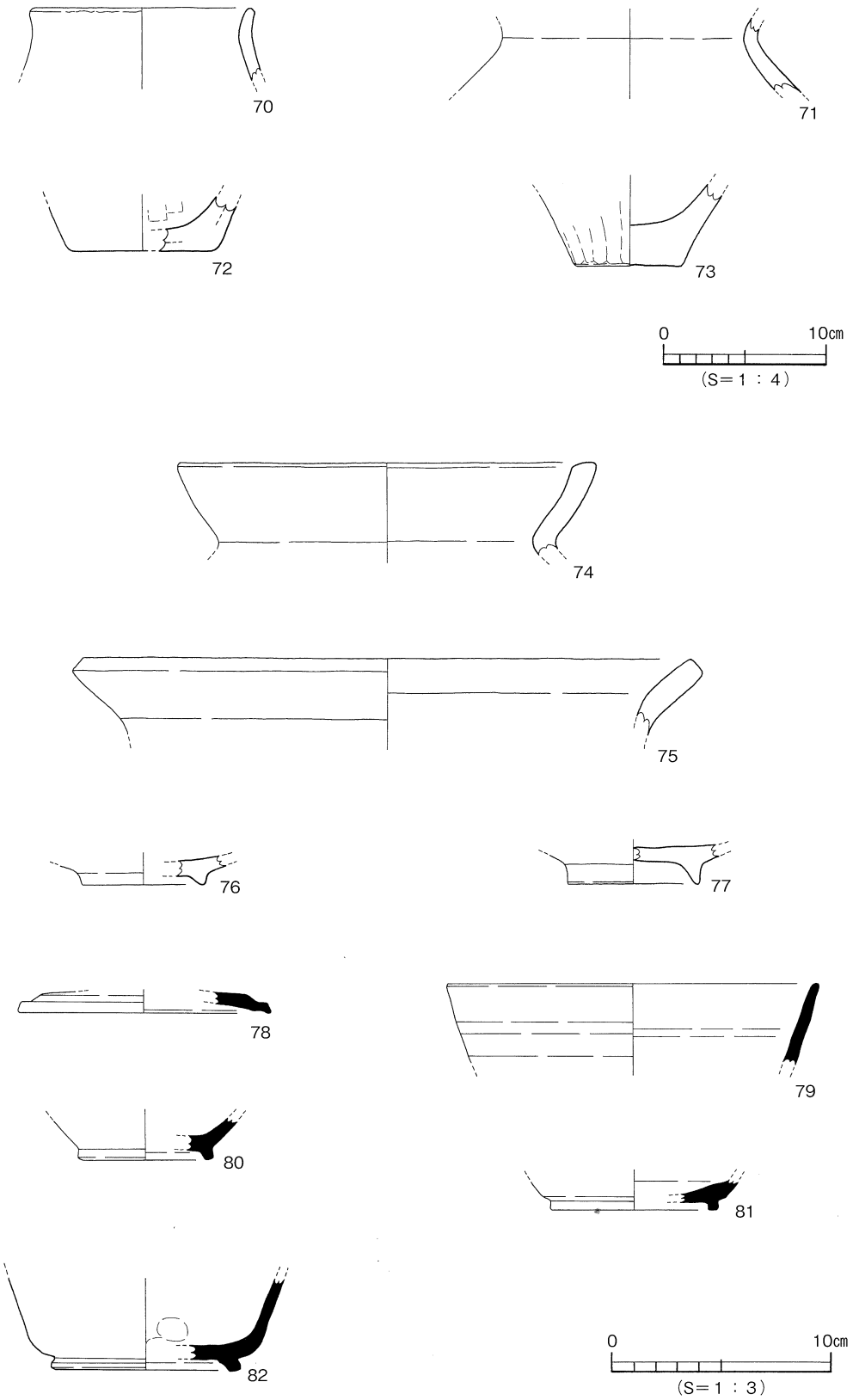
第19図　第Ⅲ－②層出土遺物実測図(1)



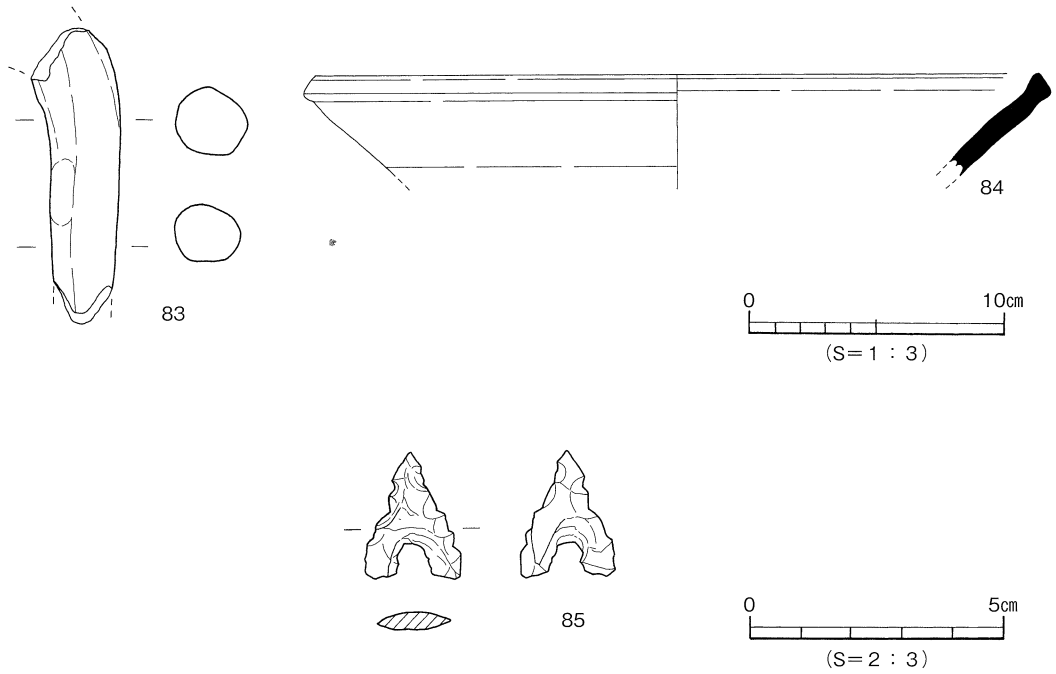
第20図　第Ⅲ－②層出土遺物実測図(2)



第21図　第Ⅲ－②層出土遺物実測図(3)



第22図　層位不明遺物実測図(1)



第23図　層位不明遺物実測図(2)

74は甕形土器の口縁部である。75は土師質土鍋の口縁部で、頸部から口縁部にかけて外傾する。76・77は椀である。断面三角形の高台を貼りつける。78～82は須恵器である。78は坏蓋である。口縁端部は水平に接地する。79は坏である。口縁端部は尖る。80～82は高台付坏である。83は土釜の脚部片である。84は須恵質のこね鉢である。口縁部外面に稜をもち、断面三角形状を呈する。85はサヌカイト製打製石鏃である。抉りの深い凹基を呈する。

表1　土坑一覧

土坑（ＳＫ）	地区	平面形	断面形	規模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	南半部	長楕円形	2段掘り	1.08×0.30×0.23	暗灰色土	弥生土器	8世紀前半以降	

表2　溝一覧

溝（ＳＤ）	地区	断面形	規模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	方向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	南半部	逆台形状	1.45×0.24～0.35×0.11	東西	灰褐色土	土師器・須恵器	8世紀前半	ＳＸ２を切る ＳＤ２に切られる
2	南半部	皿状	2.30×0.27～0.50×0.07	南北	灰色粗砂質土	土師器	8世紀前半以降	ＳＤ１、ＳＸ２を切る

表3　性格不明遺構一覧

性格不明（ＳＸ）	地区	平面形	断面形	規模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	南半部	不整形	皿状	1.41×0.47～1.40×0.10	灰色微砂質土	須恵器	8世紀前半以前	ＳＰ１に切られる
2	南半部	長楕円形	皿状	2.89×1.10～1.44×0.24～0.35	灰色微砂質土	土師器	8世紀前半以前	ＳＤ１・２、ＳＰ６・８に切られる

表4　トレンチ出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	坏蓋	口径（12.9） 残高　1.8	口縁端部は内傾し内面に段をもつ。	回転横ナデ	回転横ナデ	灰色 灰色	石・長（微砂粒） ◎		
2	坏蓋	口径（11.9） 残高　1.6	口縁端部は内傾し内面に段をもつ。	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
3	高台付坏	底径（10.8） 残高　1.5	短い高台。水平に接地する。	ナデ	ナデ	灰オリーブ色 にぶい橙色	石・長（1～9） ◎		
4	甕	残高　3.1	口頸部片。	回転横ナデ	ナデ （頸）タタキ	灰色 灰色	石・長（1～3） ◎		

表5　ＳＫ1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
5	甕	底径（6.2） 残高　4.9	平底の底部。	ミガキ （底面）ナデ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～2） 金ウンモ ◎		10
6	甕	残高　7.4	胴部片。	ミガキ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長（1～2） 金ウンモ ◎		

表6　ＳＤ1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
7	坏	残高　3.7	口縁部は内湾気味に立ち上がる。	回転ナデ （底面）ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表7　ＳＸ1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
8	坏	口径（17.2） 底径（12.4） 器高　3.3	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		10

表8　第Ⅲ－①層出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
9	深鉢	残高　2.6	口縁部外面に沈線を施す。口縁部は内湾する。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい褐色	石・長（1～2） ◎		
10	甕	残高　3.6	貼付口縁。口縁端面に刻目。沈線文5条以上。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石・長（1～2） ◎		
11	甕	残高　3.4	貼付口縁。無文。	ナデ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～3） ◎		
12	壺	口径（19.4） 残高　1.8	口縁部片。口縁端部は下方に肥厚する。口縁端面は無文。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1）赤 ◎		
13	鉢	残高　9.7	口縁～胴部片。直線的に立ち上がり、わずかにくびれる口縁部。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長（1～3） 金ウンモ ◎		
14	甕	底径（6.2） 残高　5.2	平底の底部。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長（1～5） ◎		
15	坏蓋	口径（13.0） 残高　2.0	口縁部は短く屈曲し、端部は尖り気味におさめる。	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白色 灰白色	密・長（1） ◎		
16	坏蓋	口径　14.8 器高　2.2	口縁部は短く屈曲し、端部は丸くおさめる。つまみ上面山形。ほぼ完形。	（つまみ部）マメツ （胴）回転ヘラケズリ （口）回転横ナデ	回転横ナデ	灰白色 灰色	白色粒 ◎		10
17	坏蓋	口径（17.0） 残高　1.5	口縁部は短く屈曲し、端部は尖り気味におさめる。	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白色 灰白色	長（1） ◎		
18	坏蓋	口径（17.1） 残高　1.7	口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密（1） ◎		
19	坏	口径（12.0） 残高　2.5	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は外反気味に尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密・長（1） ◎		
20	坏	口径（17.2） 残高　5.2	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
21	坏	口径（16.0） 残高　3.3	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長（1） ◎		
22	皿	口径（17.8） 残高　1.8	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部内面に沈線を巡らす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密・長（1） ◎		

第Ⅲ－①層出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
23	Ⅲ	口径（15.8） 底径（14.0） 残高　1.9	口縁部は短く外反し、端部は屈曲したのち外方に突出する。	ナデ	（口）ヨコナデ ナデ	淡黄色 淡黄色	褐色粒（1～2） ◎		10
24	高台付坏	底径　（6.0） 残高　1.6	短い高台。接地部は水平となる。	回転ナデ （底面）回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
25	高台付坏	底径　（9.3） 残高　1.9	短い高台。接地部は水平となる。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	長（1） ○		
26	高台付坏	底径　（9.2） 残高　2.0	短い高台。接地部はやや凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密・長（1～2） ◎		
27	高台付坏	底径（10.8） 残高　1.9	短い高台。接地部はやや凹む。	ナデ （底面）回転ヘラギリ	ナデ	灰色 灰色	長（1～2） ◎		
28	高台付坏	底径（12.2） 残高　1.1	短い高台。接地部はやや凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長（微砂粒） ◎		
29	高台付坏	底径（12.8） 残高　1.0	短い高台。接地部はやや凹む。	ナデ	マメツ	暗灰黄色 灰白色	長（1） ◎		
30	高台付坏	底径（15.4） 残高　2.0	短い高台。接地部はやや凹み、外側が接地する。	回転ナデ （底面）ケズリ後ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎		10
31	高坏	底径（17.2） 残高　1.4	脚部片。端部は上下に拡張する。	回転ナデ	回転ナデ （自然釉）	灰色 灰白色	密・石・長（1） ◎		
32	甕	残高　4.8	口頸部～肩部片。	回転横ナデ （頸）カキメ	（頸）回転横ナデ タタキ	灰白色 灰色	長（1～3） ◎		
33	椀	底径　（6.6） 残高　1.6	断面三角形の高台。	ナデ	ミガキ	橙色 灰白色	石・長（1～2） ◎		
34	椀	底径　（7.0） 残高　1.5	断面三角形の高台。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長（1～2） ◎		
35	椀	底径　（7.3） 残高　1.5	断面三角形の高台。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長（1） ◎		
36	椀	底径　（6.6） 残高　1.6	断面四角形の高台。高台は外方向に張り出す。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長（1） 金ウンモ ◎		
37	椀	底径　（6.6） 残高　1.25	断面三角形の高台。高台は外方向に張り出す。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1）・赤 金ウンモ ◎		
38	坏	底径　（7.4） 残高　1.7	底部片。	（底）回転ナデ （底面）回転糸切り	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長（1～2） ◎		
39	坏	底径　（8.8） 残高　1.1	底部片。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長（微砂粒） 金ウンモ ◎		
40	坏	残高　1.2	底部片。	ナデ	ナデ	明赤褐色 にぶい黄褐色	長（1） 金ウンモ ◎		
41	釜	残高　1.5	鍔部。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1） ◎		
42	瓦器椀	残高　2.0	口縁部片。	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	石・長（1） ◎		

表９　第Ⅲ－①層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
43	砥石	欠損	凝灰岩	8.80	5.20	4.30	247.67		10

表10　第Ⅲ－②層出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
44	深鉢	口径（23.0） 残高　3.8	肥厚する口縁部外面に沈線を施す。橋状把手。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい黄褐色	石・長（1～3） ◎		11
45	深鉢	残高　2.2	肥厚する口縁部外面に沈線を施す。	ナデ	マメツ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長（1～2） 金ウンモ ◎		11
46	深鉢	残高　3.1	口縁部外面に沈線を施す。口縁部は内湾する。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～3） ◎		11
47	深鉢	残高　2.8	口縁端面に刻目を施す。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～2） ◎		11
48	深鉢	口径（28.0） 残高　8.0	無文。口縁部はゆるやかに外反する。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～5） ○		11

第Ⅲ－②層出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
49	深鉢	口径（25.1） 残高　5.4	無文。口縁部はゆるやかに外反する。	マメツ	マメツ	暗灰色 灰色	石・長（1～2） ◎		11
50	浅鉢	底径　7.6 残高　2.1	上げ底の底部。	マメツ	マメツ	灰黄色 淡黄色	石・長（1～3） ◎		11
51	甕	口径（22.8） 残高　4.0	折り曲げ口縁。沈線文3条以上。	マメツ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～5） ◎		
52	甕	残高　6.2	折り曲げ口縁。直線沈線文8条以上、波状の沈線文5条以上。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長（1～2） ◎		11
53	甕	残高　3.2	貼付口縁。口縁端面に刻目。沈線文9条以上。	ナデ	ナデ	灰褐色 橙色	石・長（1～2） ◎		11
54	壺	口径（19.7） 残高　4.1	直立する口縁部片。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～2） ○		
55	壺	口径（18.6） 残高　5.2	外反する口縁部。端面に格子文を施す。	（口）ナデ ハケ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） ◎		11
56	甕	口径（17.8） 残高　2.6	「く」字状を呈する口縁部。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1） ◎		
57	甕	残高　2.5	「く」字状を呈する口縁部。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） ◎		
58	甕	残高　3.5	「く」字状を呈する口縁～頸部。	（頸）ナデ マメツ	ナデ	橙色 褐灰色	石・長（1～2） ◎		
59	甕	底径　(5.4) 残高　5.0	平底の底部。	ナデ	マメツ	橙色 褐灰色	石・長（1～2） ◎		
60	甕	底径　(6.4) 残高　3.9	平底の底部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～3） ◎		
61	皿	残高　0.6	底部片。内外面に赤色顔料が付着。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ◎		
62	坏蓋	口径（21.5） 残高　1.2	口縁端部は丸くおさめる。	ナデ	ナデ	灰色 灰白色	石・長（1） ◎		
63	高台付坏	底径　(8.7) 残高　1.5	短い高台。接地部は水平となる。	回転横ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
64	高台付坏	底径（11.1） 残高　1.2	短い高台。接地部は水平となる。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長（1） ○		
65	高台付坏	底径（11.2） 残高　1.5	短い高台。接地部は水平となる。	ナデ	ナデ	暗灰色 灰色	石・長（1～2） 金ウンモ ◎		

表11　第Ⅲ－②層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
66	石鏃	完形	サヌカイト	2.90	2.10	0.45	2.13		11
67	石鏃	未成品	サヌカイト	3.40	2.10	0.40	2.72		11
68	石棒	欠損	結晶片岩	15.30	7.00	4.80	730.84		11
69	台石	欠損	花崗岩	20.30	16.20	7.20	2,029.93		

表12　層位不明遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
70	壺	口径（13.6） 残高　4.4	短頸の口縁部片。	ナデ	ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石・長（1～2） 金ウンモ ◎		
71	壺	残高　4.4	頸部片。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～5） ○		
72	壺	底径　(9.2) 器高　3.3	平底の底部。	ナデ	ナデ	橙色にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ○		
73	壺	底径　(6.6) 残高　5.0	平底の底部。	ナデ	ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石・長（1～3） ◎		
74	甕	口径（19.2） 残高　4.1	口縁部片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～3） ◎		
75	土鍋	口径（28.3） 残高　3.5	口縁部片。	ナデ	マメツ	灰褐色 にぶい黄褐色	石・長（1～2） ◎		
76	椀	底径　(5.6) 残高　1.3	断面三角形の高台。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 淡黄色	石・長（1～4） ○		
77	椀	底径　(6.0) 残高　1.8	断面三角形の高台。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	密 ◎		
78	坏蓋	口径（11.6） 残高　0.7	口縁部は短く屈曲し、端部は水平に接地する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

層位不明遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
79	坏	口径（17.0） 残高　3.7	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰白色	密 ◎		
80	高台付坏	底径（6.2） 残高　1.9	短い高台。接地部は水平となる。	ナデ	ナデ	明オリーブ灰色 明オリーブ灰色	微砂粒 ◎		
81	高台付坏	底径（7.7） 残高　1.4	短い高台。接地部は水平となる。	回転ナデ （底面）ナデ	ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
82	高台付坏	底径（8.7） 残高　4.3	短い高台。接地部は水平となる。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	石・長（1） ◎		11
83	釜	残高　12.0	脚部片。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ◎		
84	こね鉢	口径（29.4） 残高　4.0	口縁端部は上方へ拡張される。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	密 ◎		

表13　層位不明遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
85	石鏃	完形	サヌカイト	2.90	2.10	0.45	1.04		11

第４章　調査の成果と課題

本調査では、弥生時代から中世における集落の構造解明及び範囲確認を主目的として調査を実施した。その結果、主に古代・中世の遺構と、縄文時代から中世に及ぶ遺物を確認することができた。本調査区は狭小であり、かつ遺構内からの出土遺物が少ないため時期決定が困難であったが、出土遺物と遺物包含層である第Ⅲ層との切り合い関係から遺構の時期比定を行った。

遺構は、溝・土坑・柱穴などを検出した。古代以前の遺構としてはＳＫ１がある。ＳＫ１内からは弥生時代中～後期の土器が出土しているが、第Ⅲ層との切り合い関係から弥生時代の遺構とは断定できなかったため、古代以前の遺構とした。ただし、弥生土器は第Ⅲ層を含めて多量に出土しているため、周辺域において当該時期の集落遺構が存在することは明らかである。また古代の遺構はＳＤ１がある。わずか１ｍあまりの検出であったが、断面形態から人工的に掘り込まれたものと推定され、かつ直線的に東西方向に伸びているため集落の区画溝などである可能性が高い。その他、古代以降の遺構としてはＳＤ２や柱穴がある。柱穴は建物配置を示す位置での検出はなかったが、周辺地域において集落が広がっていたことを示す重要な資料である。

遺物は、遺構内及び第Ⅲ層から出土している。第Ⅲ層から出土した遺物には、縄文土器･弥生土器･土師器･須恵器･石製品などがあり、発掘調査としては出土例が少ない縄文土器や石鏃が注目される。これまで当平野内における縄文時代関連の遺物は表採資料がほとんどであったため、今後の整理作業の進展によって遺構の存在を推測する上で貴重な資料である。また在地の豪族である河野氏が活躍した時代の遺物が第Ⅲ層で出土していることから、今後の発掘調査によって当該時期の遺構が確認される可能性が高い。

本調査によって、直接的な河野氏関連の遺構は検出されなかったが、今後は周辺域における調査を進めることにより、河野氏関連の遺構のほか弥生時代～中世における集落の構造とその範囲や変遷の解明を進めていきたい。

写 真 図 版

写真図版データ

1．遺構は、35㎜判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影している。

使用機材：カメラ　ニコン FM10
レンズ　ズームニッコール35～70㎜
フィルム　白　黒　ネオパン SS
カラー　エリートクローム

2．遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：カメラ　トヨビュー 45G
レンズ　ジンマー S 240㎜ F 5.6他
ストロボ　コメット /CA32・CB2400
スタンド等　トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム　ネオパンアクロス

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：引伸機　ラッキー 45MD・90MS
レンズ　エル・ニッコール135㎜ F5.6A・50㎜ F2.8N
印画紙　イルフォードマルチグレードⅣ RC ペーパー

【参考】『埋文写真研究』vol.1～19　『報告書制作ガイド』　［大西朋子］

1．調査地遠景（西より）

2．調査前全景（南より）

図版 2

1．掘削風景（南より）

2．遺構検出状況（南より）

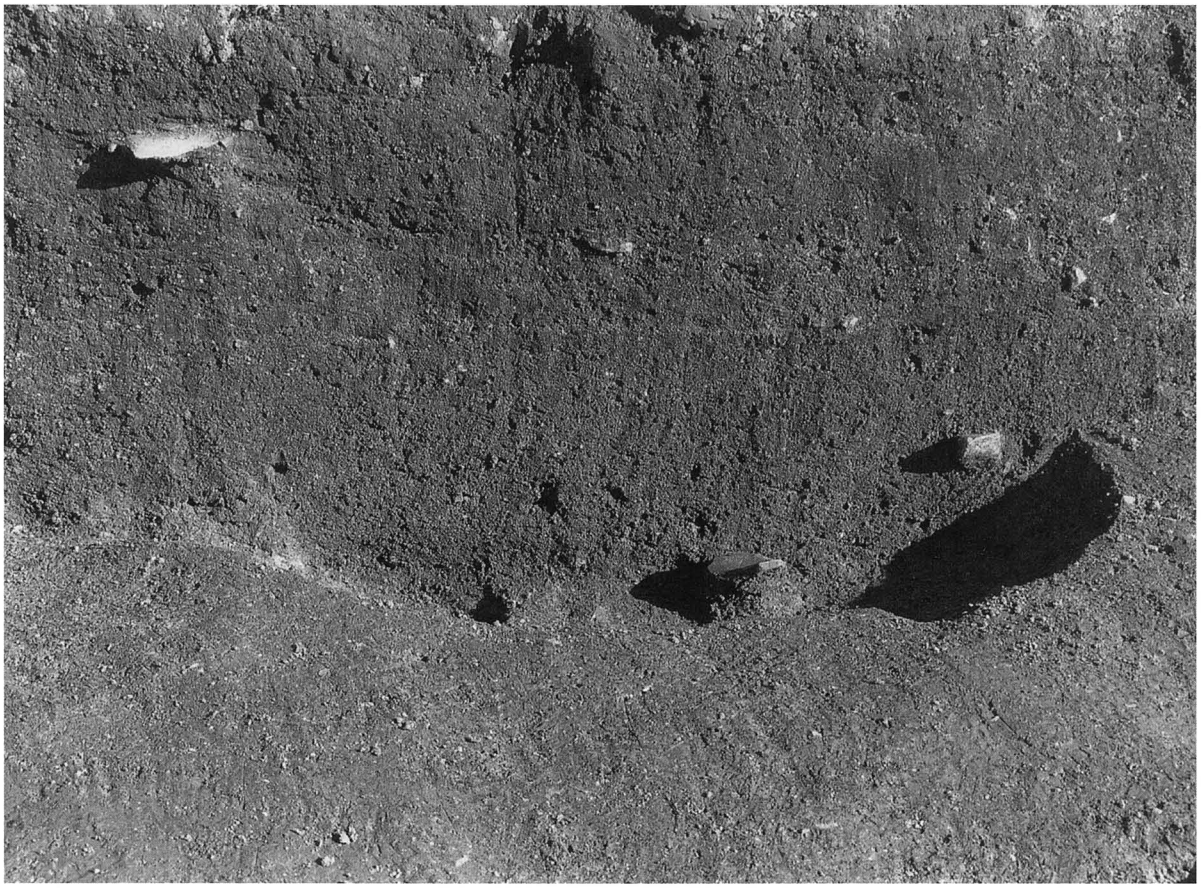
1．東壁土層①（北西より）

2．東壁土層②（南西より）

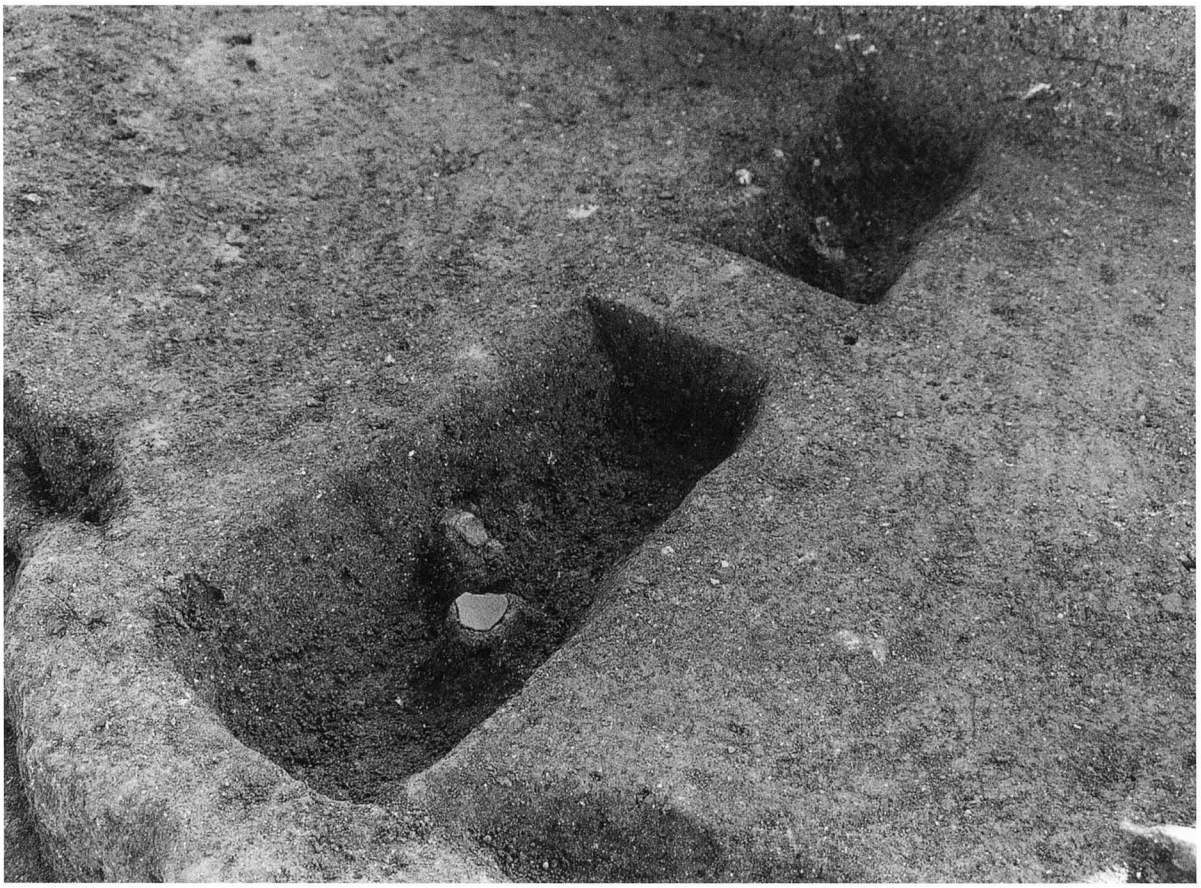
図版 4

1．東壁土層③（南西より）

2．東壁土層④（南西より）



1．ＳＫ１完掘状況（西より）

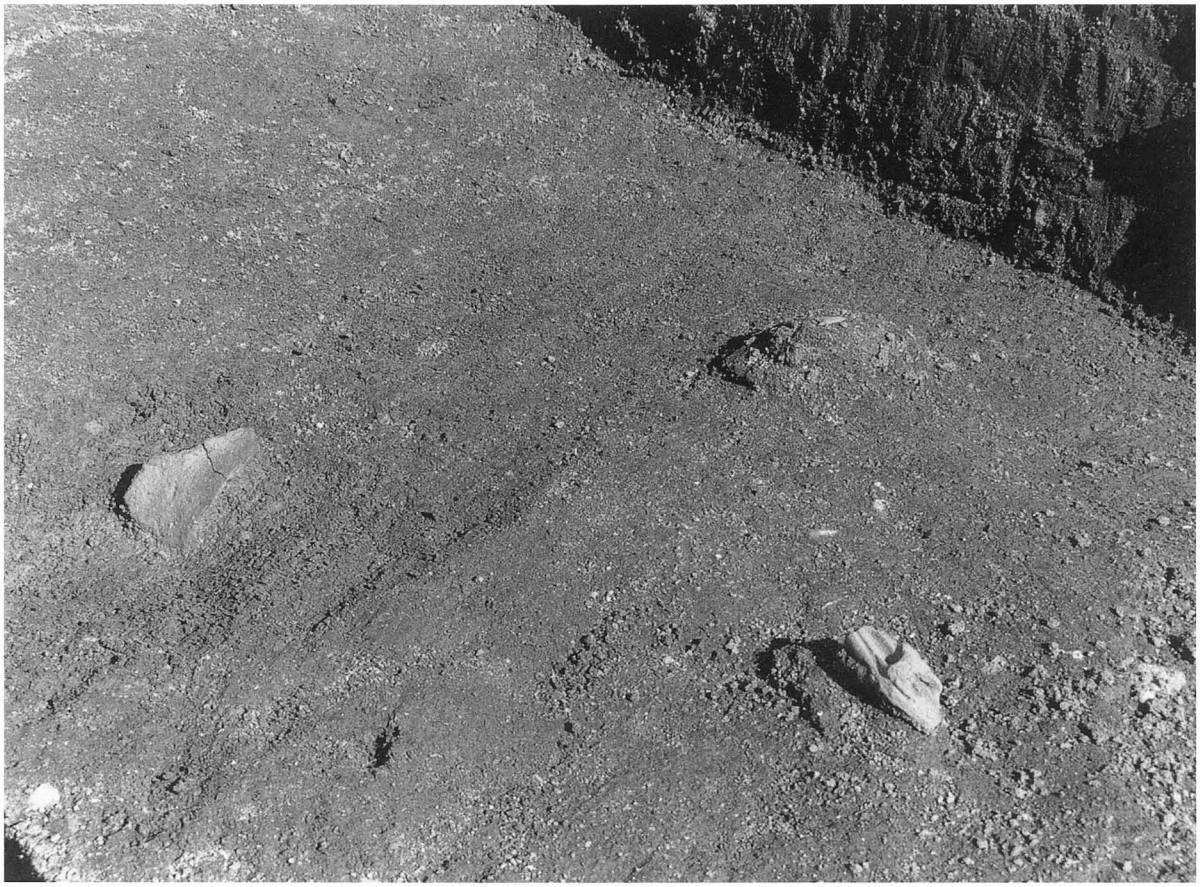


2．ＳＤ１遺物出土状況（南西より）

図版6

1．ＳＸ１検出状況（西より）

2．ＳＸ１完掘状況（西より）



1．第Ⅲ層遺物出土状況①（南西より）

2．第Ⅲ層遺物出土状況②（南より）

図版 8

1．第Ⅲ層遺物出土状況③（西より）

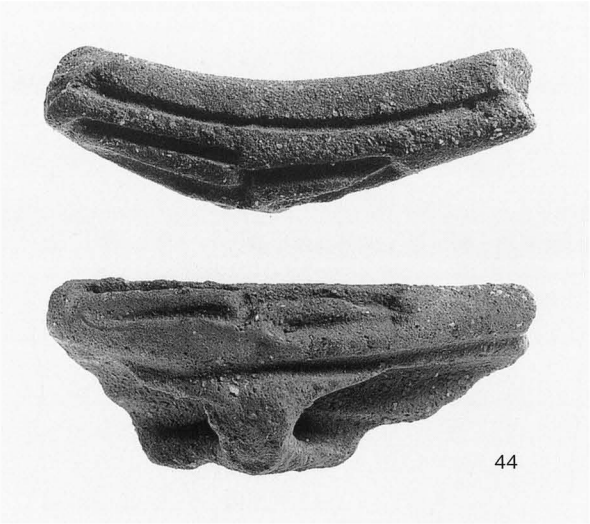
2．遺構・第Ⅲ層完掘状況（南より）

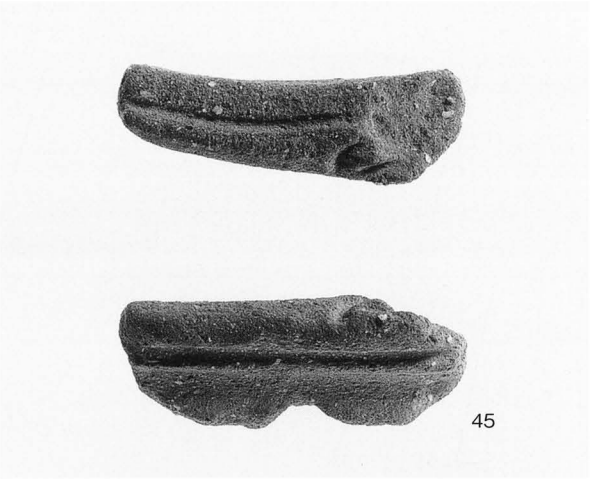
1．作業風景（北より）

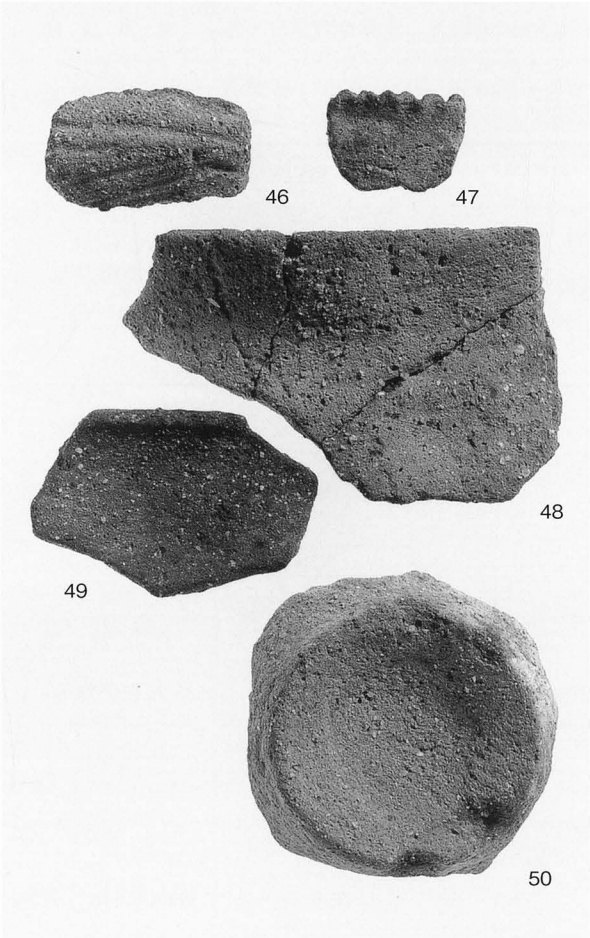
2．現地説明会風景（北より）

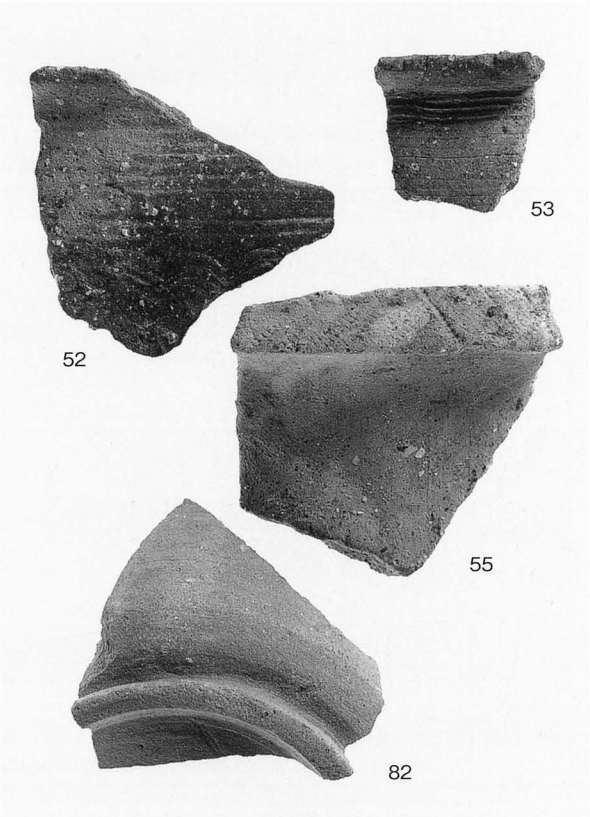
図版10

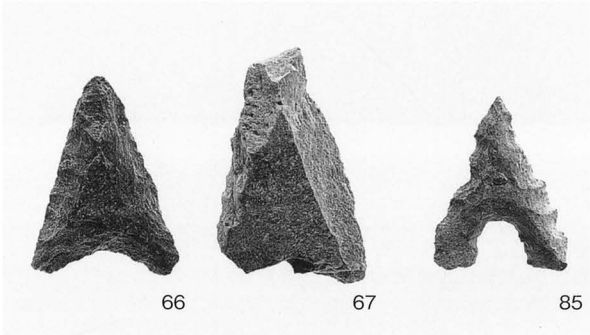
1．ＳＫ1出土遺物(5)、ＳＸ1出土遺物(8)、第Ⅲ－①層出土遺物（16・23・30・43）

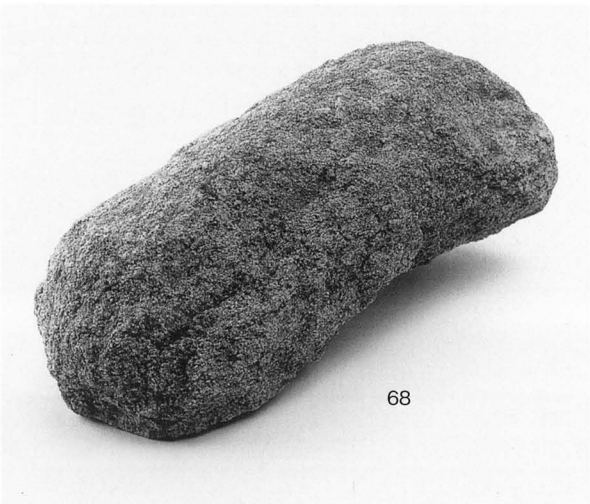












1．第Ⅲ－②層出土遺物（44～50・52・53・55・66～68）、層位不明遺物（82・85）

報告書抄録

ふりがな	ぜんおうじおにわきたいせき
書名	善応寺大庭北遺跡
副書名	大庭小松集落道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第128集
編著者名	山之内志郎
編集機関	松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	市教委：〒790-0003　松山市三番町六丁目６番地１　TEL(089)948-6605 市埋文：〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６　TEL(089)923-6363
発行年月日	西暦2009年１月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぜんおうじおにわきたいせき 善応寺大庭北遺跡	えひめけんまつやましぜんおうじ 愛媛県松山市善応寺	38201		33° 71′ 18″	132° 47′ 27″	20080107～ 20080215	86	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
善応寺大庭北遺跡	集落	縄文 弥生 古代 中世	土坑、溝	縄文土器、石鏃 弥生土器 須恵器 土師器	

要約	風早平野に立地する弥生時代～中世の集落。調査では多数の柱穴を検出したが具体的な建物配置などは不明である。包含層で縄文土器と石鏃が出土し、この地で生活した人々の生業の実態を知る手かがりとなるものである。

松山市文化財調査報告書 第128集
大庭小松集落道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

善応寺大庭北遺跡

平成21年１月31日　発行

編・集　松山市教育委員会
発　行　〒790-0003　松山市三番町六丁目６番地１
ＴＥＬ（089）948-6605

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６
ＴＥＬ（089）923-6363

印　刷　セキ株式会社
〒790-8686　松山市湊町７丁目７番地１
ＴＥＬ（089）945-0111